

りまして、先づ試みにその症状の大體を舉げてみますならば、絶えず頭が痛んだり、頭が重かつたり、グラ／＼眩暈がしたり、氣がボーッとしたり、フラつき倒れさうになつたり、夜分さうしても眠れなかつたり、眠つても夢ばかり見たり、耳が鳴つたり、眼がかすんだり、書物なぞを讀むとすぐ疲れたり、眼の前をキラ／＼とした蛇のやうなものが澤山飛ぶやうに見えたり、全身が痒かつたり、方々が痛んだり、手足の感じが鈍くなつたり、ものを喰べるさいつ迄も腹が重かつたり、酸っぱいお／＼くびが出たり、食後キラ／＼とする痛みを感じたり、長い間便秘が続いたり、腹がたへず鳴つたり、激しい下痢が起つたり、それから又、少し歩いてても動悸が昂ぶつたり、今にも息が切れさうになつたり、胸を板で締めつけられるやうな感が起つたり、少しのこゝに顔が赤くなつたり、尙又夢をしたり、その他生殖機能が順調でなかつたり、だん／＼

と全身が衰弱して、少し歩くか又は重いものを持ち上げたりしてもスグ疲れたり、だん／＼身體が瘦せて行つたり、そうして、精神は恰も雪模様の空を見るやうに、さんよりして、何をやつても面白くなく、書物を讀みかけるこゝ、いつの間にか書物以外のこゝを考へ、さて書物以外の事に従事するこゝ、急に書物が讀んでみたくなつたり、いくら讀んでみてもチットモ頭に入らなかつたり、その癖又いろ／＼な書物が讀んでみたくなつたり、僅かな事に非常な感動を起してみたり、小説なぞを讀んで無暗に泣いてみたり、他人の行爲を有難く思はなかつたり、人の言ふこゝに疑惑を抱いたり、世の中の總ての人が自分をのゝしつてゐるやうに思つたり、果は人生をつまらないものだと思ふやうになつたり、いつ迄生きてゐたこゝに碌なこゝは出來ないだらうと思つて厭世思想を抱いたり、それかと思ふと、絶えず自分の病氣を氣にし

ていらくし乍ら何ミかこの苦痛を逃れる方法はないものかと思つて性急つたりいはゞ果しなく迷ひに迷ふ——と言ふのが、神経衰弱の最も普通な症状でありますがこの他なほ、ミても醫者が見てなんミも診断のつけやうがなく、しかも激烈極まる症状を現すこもあるのであります。

一體かう言ふ症状は何を原因として起るかと言ひますに、その實これと言ふ原因を指摘するこは何人にミつてもむつかしいのであります。尤も書物を繙けば、やれ心身の過勞が原因だミか、やれ過度のオナニーが原因だミか、或はあゝ言ふ事が原因になるミか、かう云ふこが原因になるミか、いろく原因があけられてるますが、要するにそれらの原因は一面の觀察にすぎないのであります。何が原因になつたミ、ハッキリ言ふこは出來ないのであります。學生が神経衰弱になるミ過度の勉強の結果だらう

ミ言ひ、相場師が神経衰弱になるミ、借金が原因であらうミ言ひ、遊治郎が神経衰弱になるミ、耽溺の結果であらうミ言ひ、或は過度の飲酒、過度の喫煙が原因になつたであらうミか、或は過度の性的行爲が原因になつたであらうミか、なんのかんの言ふのであります、それは單なる説明にすぎないのであります、何ミか具體的に原因を指摘しなければ氣が済まぬために、それらのものを並べ舉げるのに過ぎません。いくら勉強をしたミてちつミも神経衰弱に罹らない學生がおります。朝から晩迄煙草をのみづめにしてるたミて平氣である人があります。随分足しゆく狭斜の巷に出入して身體を虐待しても、いよく益々潑刺ミして生きて行く人があります。だから神経衰弱の原因は當然その人の體質の點から觀察しなければ成りません、即ち神経衰弱になりさうな體質を持つてゐる人が神経衰弱になるの

でありまして、そう云ふ體質を持つた人が、何かの動機でそれらの各種の症状を現はすを見るべきであります。

さて然らばそのやうな體質を持つた人を、うまい具合に取扱つたならば、決して神経衰弱を起さぬか云ふに、必ずしもさう云ふことは云へないだらうと思ひます。だから神経衰弱を豫防するなぞ云ふことは到底出来ない相談であると思ひます。神経衰弱を分類して、先天的のものか、後天的のものかに分けるのはそれは寧ろ便宜上のことでありまして、その間に判然たる區別のあるものではありません。

尤も神経衰弱が近代的の病であるといふ事だけは、さうやら本當であるらしいと思ひます。太古のことは研究のしやうがありませんから大昔にも神経衰弱がなかつたこと断言することは出来ないものでありまして、何事も

知らぬといふことの嫌ひな考證家にでも聞いたなら古事記の中に既に神経衰弱が記載されてゐるなき、言ふかも知れませんが、とにかくにも神経衰弱が近代になつて著しく殖むたことは事實であります。人口が年々殖むるので、その割に神経衰弱者も殖むるといへばそれ迄ですが、神経衰弱者の殖む方は人口の殖む方よりも遙かに多いやうであります。實際よく考へて見るに、近代の社會生活なるものが神経衰弱の有力な原因となつてゐるのだ、言へばいひ得ない事はありません。けれ共、社會生活の如何なる點が、神経衰弱の誘因となるのか、きかれたら誰しもその返答には困るであらうと思ひます。一寸考へるに都會生活の窮屈さや、忙しさや、或は絶えず激しい物音が聞けて來る、いふことは、人間の神経を異常に刺戟して、神経衰弱を起さしめるだらうと思はれますけれども、それが

と言つて都會人の中にチットモ神経衰弱に罹らぬ人は随分澤山あるのであります。

けれども今挙げたやうな原因が神経衰弱を起し易い體質の人にいろいろの工合に働いて神経衰弱を起すものだらうといふ事は、臆ろけ乍ら想像するここが出来るのであります。だから神経衰弱を一つの原因に還元して、その原因を除いて治さうとするところは賢い方法とは言へないのであります。實際、そつういふ風な方法によつて治るものなら、現代の醫學に依つて立派に神経衰弱は治らなければならぬのに、その實、物質醫學によつてチットモ治す事が出来ぬのは、神経衰弱なるものが、そのやうに單純な原因で起るものでないと言ふ證據であると言つて差支へありません。

併し乍ら何故に神経衰弱が近代に於て特に多いかと言ふことに就いて

は、一考を要すると思ひます。近代人に特有な事は病氣に對する知識が、いろいろの形によつて得られ易い事であります。従つてその知識が神経衰弱の原因となるであらう事も考へ得るのであります。前にも申しましたやうに慢性病患者の多くは病氣を作つてゐるのであります。病氣を作る言ふことは病氣を知つてゐるからなのであります。胃がどこにあるかを知らないものは、胃部に痛みがあつたとき、胃が痛いのだと思ひません。心臟がどこにあるかを知らぬ者は、たゞ息切れがしても、心臟病だと思へることは出来ません。いろいろの書物なり新聞雜誌なきに、いろいろの症候とその病名が書かれてあるために、その知識によつて患者はその病氣をこしらへ上げるのであります。頭が重いのは神経衰弱である、一たん考へたが最後、こゝろは自分が神経衰弱であると思つたその觀念から出發

して、神経衰弱について擧げられてある症候の悉くを自分で作り出すのであります。

尙又いろく／＼な具體的な神経衰弱の原因が、書物なごに書かれてあります。その原因に似たことを行つたとき、それがすぐさま暗示となり、神経衰弱を起すことがあります。心身の過勞が神経衰弱の原因だと言かれてあります。少しはけしく精神的の苦勞をしたり、又は肉體的に勞働したりするに、神経衰弱にかゝるのではないかと心配し、そうして遂に本當の神経衰弱になるのであります。

だから神経衰弱なるものは、その人の持つて居る知識に對する考へ方を變へれば、これを豫防することも、治療することも出来るのであります。最近著しく殖つた血壓恐怖症の如きは、全く血壓を計ることが出来るために

起つた一種の神経衰弱を見做して差支へありません。血壓が高いことが、腦溢血と關係があるやうに書かれてある爲に少し血壓が高いと腦溢血を起しはしないかと恐怖し、或は温泉へ出掛けたり、或は海邊へ行つたりして静養する人がありますが、これ等は血壓に關する知識の犠牲となつたものと云つて差支へありません。血壓が高くなるのは、その人の生存上必要があつて高くなるのでありますから、もしその人がその血壓を下げようと思つて色々な方法を試みたならば、身體に對して一種の反抗的行爲をなしてゐる譯であります。即ち血壓の高い人が血壓を下げようとはかる事は、その身體を大切にするのではなくて、むしろその身體を虐めてゐることなのであります。これは少し常識を働かせて考へたならば、何人もよくわかることでもありますのに、唯腦溢血が怖いといふ理由のもに、却つて自分の身

體を虐待するのであります。血壓を下げようとする努力に依つて、腦溢血を防ぐことは可能であるかも知れませぬが、それに依つて他の病氣を惹き起すであらう事も又見易い道理であります。血壓に限らずその他いろいろの事に頭を悩まして、危険から遠ざからうとする神経衰弱者はその實別の危険を作りつゝあるのであります。症状が少い場合には、その一つ一つに、かゝづらつてゐることも出来ませんが、段々症状が多くなるに、遂にはやりにきれなくなつて、底知れぬ煩悶に陥るのであります。

だから神経衰弱者はみんな症状があらうとも、それはみんな自分が持ち出した事であるから、その症状を驅逐しようとすることは、畢竟新しい症状を輸入するに過ぎないことを忘れては成りません。尤も人によつて、ある特殊の症状だけを、殊更に氣にする人があります。たゞへば甲の神経衰

弱者は夢精を何よりも心配します。乙の神経衰弱者は不眠を殊更に心配します。丙の神経衰弱者は下痢を一ばん心配します。しかもたま／＼それらの症状が去つた場合には決してそれで満足はしません。即ちこん度は新しい症状をさらへて来てそれを心配の種とします。而も、心配する程その症状は益々著しくなるのが常でありまして、かうして神経衰弱者は先から先へこめぎなく、いはゞ求めて苦勞するのが常であります。

多くの神経衰弱者は、病を恐れ乍ら病を求めずに居れないのであります。つまり病に對する執着が日一日と激しくなつて行きます。五年でも十年でも、いつ迄でも病氣漁りは止むこゝがありません。たゞへ症状が去つても、尙且自分では確に症状を持つてゐるを考へて居ります。不眠症の患者なごは、その實グウ／＼と眠てゐながら、チットモ眠らなかつたを考へ

て居ります。一年來、二年來、一日も眠られなかつたなごみ訴へる患者は、その實よく眠つてゐるのであります。

もの忘れごみか、注意の散漫ごみかは、みんな患者自身がそうだご思ひ込んでゐるに過ぎません。自分は神経衰弱だから書物を読んでもその内容を記憶するごみは出来んのだご信じ切つて居るのであります。注意が散漫だご信じ切つてゐるために、ものを讀んでもわざご注意を散漫にしてしまふのです。又、疲労し易いご思つたが最後、少し歩いててもスグ疲労してしまふのであります。その實その患者の考をかへさせて歩かしてみれば健康人ごかはるごみなく歩きます。もの忘れし易いごいふ患者の注意力や記憶力を調べてみますご、ちつごも常人ご變つて居りません。

だから患者は、自分の意識を働かせない時には、常人通りの仕事を平氣で

行ふごみが出来るのであります。たごへば火事に出逢ふごみか、地震に出逢ふごみか、所謂危急存亡の際には自分で疲労し易いごみ、又は自分で身體が衰弱してゐるごみも考へる餘裕がないために常人通りの仕事がやすくごみ出来るのであります。往年關東の大震災の際に年來の胃病が粗食によつて却つてみごみに治つたご言ふが如きは立派にこの間の消息を語るものごいつてよいのであります。一たん粗食をしても胃病が治るものだご知つたが最後、ごんごは又その暗示が確かに利いて、却つて病を治し易くなるのであります。つまり繰返へして申します通りに、何かの動機で考へ方をさへ變へたなれば、最早神経衰弱なるものは存在しないご言つてよいのであります。

ごところが從來の治療法を見ますご、後にも詳しく申上げる通り、少しもご

の根本に遡つて居ないのであります。神経が衰弱してゐるのであるからその神経を活潑にせしむるのが唯一の治療法であるを考へるのは一應尤もな事でありませんが、ものゝ考へ方なるものは、どんな薬を與へたて變はる譯のものではありませんから從來の物質醫學は、神経衰弱に對して何等の權威を持たなかつたのであります。

神経衰弱を腦の病だなき、解釋するのは根本的の誤りであります。つまりその人の局所の病氣ではなくして、その人全體の病氣なのであります。だから、神経衰弱者が大脳を沈靜する臭剝なきをのむのは決して當を得て居ないのであります。又轉地をしたて安靜にして居たて、なほる譯のものでありません。少なくも轉地や安靜が有効であると思ふのは間違つて居るをいはねばなりません。

二、ヒステリー

神経衰弱と同じやうに、その本態の分らぬ慢性病にヒステリーがあります。ヒステリーといふ言葉は、西洋ではすつと昔からあるやうであります。日本語でこの状態を適當に言ひ現したものを私は知りませんが、俗に「血の道」ミといふ言葉がその一部分を示すのかと思はれます。

ヒステリーミといふ言葉は「子宮の病」ミといふギリシヤ語ヒステリコスからこつたものであるやうで、昔の人がヒステリーは女子の性的生活と關係を持つて居るものミ認めたらしいミは、これに依つて明かであります。血の道ミといふ言葉も主として、女子の病に用ひられて居るやうであります。その意味は尙更漠然ミして居ります。ミころが西洋でもヒステリーが血液の障害であるを認められたのは事實でありまして、ある學者は血液内

の酸化作用に障害があるときヒステリーを起すのだといひ、又ある學者は血液内の一種の新陳代謝機能が障害を受けたとき、之を起すものであらうなごい説いて居りますが、いづれもそれは片寄つた見方でありまして、若しヒステリー患者の血液に酸化作用の障害があるとしたならば、それは寧ろヒステリーから起る結果でありまして、ヒステリーを起す原因ではないのであります。同様に血液内の一種の新陳代謝障害がヒステリー患者に認められるごしましたならば、それはヒステリーの原因ではなくして、やはりヒステリーの結果ご見做すべきであります。有名な神經學者のシャルコーの如きは、特殊の感覺の障害又は感覺の麻痺の爲に生ずる人格の二重化ごこのヒステリーごが關係があるものだご言つて居りますが、この言葉もよく考へて見るご極めて曖昧であります。クレイペリンの如きは、生れつ

きの精神異常であるご云つて居りますが、なる程かう言へば差障りはないご思ひます。全くヒステリーは神經衰弱ご同じく生れつきの精神異常にちがひありません。精神異常ごいふご、精神だけに異常があるやうに思はれますが、寧ろ精神も肉體もくるめたその人全體の異常であるごいつた方がよいかも知れません。そうしてヒステリーの際に於けるいろくゝの症状なるものは、みな、原因ではなくして、結果なのであります。

しかし神經衰弱が必ずしもその人の性的生活ご深い關係を持つてゐるごいふごこの出来ぬのに反し、ヒステリーがその性的生活ご密接の關係を持つてゐるらしいごは誰しも認めて居るごころであります。もつとも青年の神經衰弱の大部分は既に申上げたやうに、性的生活ご密接な關係を持つて居りまして、人間全體を考へる以上、性的生活ご切り離して病氣を取

扱ふのは當を得て居りませんが、とにかくヒステリーはその性的生活との關係が極めて濃厚なのであります。すべて女性の通常の行爲なり、異常の行爲なりには、その背後に多かれ少かれ性の問題を隠して居るものでありまして、ヒステリーの患者に面したならば必ずその性的生活に目をつけねば成りません。満されざる性慾が、ヒステリーの誘因となることは屢々あるのであります。患者の現在にその方面の關係が認められなくても、過去の生活を穿鑿してみれば、どこかに性的の原因を発見するのであります。性に關するところは、ミかく口へ出して言ふことを憚ります。だからその方面に於ける慾望の不滿の念は、常に患者の心の中に段々蓄積して、そうして根強いヒステリーの原因を作る場合が少くないのであります。だから精神分析學に於ては、患者の過去に於ける満されざる慾望を明るみへ出

してしまひ、それに依つて病の驅逐を圖らうとするのであります。が、實際又精神分析に依つてヒステリーの治る例は決して少くありません。

精神分析なきといふも、何んだか大袈裟に聞えます。共、極めて譯のないことでありまして、たゞ患者がその心の中に藏してゐることを吐き出させるのに過ぎないのであります。心に思つてゐることを吐き出させるには時としてたつた一言葉で澤山であります。だからヒステリーが、たつた一言葉で治るさういふ例も少くはありません。昔の名醫と稱せられた人は、精神分析の理論なきは知らないで、いはゞ直観によつて、精神分析を治療に應用してゐたのであります。

もよよりヒステリーの原因は、性的生活に於ける異常だけに限るものではありません。周囲の關係さか境遇の如何さか、その他種々雑多な原因がそ

の個人に働いて出来上るものでありますが、矢張り神経衰弱と同じやうに、その體質素質が、その發生に關係のあることは言ふ迄もないことであり、また統計によります。殆どすべての女子は多少の程度にヒステリーに罹つてゐる言はれて居りますが、とにかく女子の慢性病を論ずる際には必ずこのヒステリーを念頭に置かねばなりません。高い發熱や激しい下痢が良人の放蕩を原因としてゐるやうな例は屢々あるのであります。そう云ふ場合いくら藥をのませようが、いくら轉地療養をさせようが、そんな事で治る筈がありません。而もそう云ふ原因は通常患者自身は知らずに居るのであります。また實際自分の嫉妬がはげしい下痢の原因とならうなきは、誰だつて考へつきません。よし又考へつゝいたして、醫者に向つて輕々しくそれを白狀はしません。たゞひ又、それを白狀したところが、醫者の

方でもそんな馬鹿な事があるものか、一笑に附してしまひます。だからヒステリーはこの點に於て難治病なのであります。

さて、ヒステリーの場合にはどんな症狀が起つて來るか、申します。先づ精神方面に於ては感情に著しい障害を受けます。いはゞ喜怒哀樂の情が常なき有様であります。即ちちよつとした事に感情が激しい動搖を起します。今泣いてゐたかと思ふミスグ笑ひだし、今笑つてゐたかと思ふミスグ怒り出します。非常に快活になつたかと思ふミス、非常に憂鬱になり、時として自殺をさへ致し兼ねません。

理解力、記憶力には、さしたる障害のないのが普通でありまして、時には却つて觀察力が他人よりも鋭くなることがあります。なんでも目新らしいことには心をひかれ易いのであります。新らしい宗教でも建てられま

す、スグそれに共鳴して熱烈な信者になります。さうして常に何かしら精神に一種の刺戟を欲しく思ひ、時には勝手にその刺戟を自分自身の想像によつて作り出し、いつの間にか空想したことを事實だと思ふやうになるのであります。人に害を受けもしないに、人に害を與へられたといふやうに訴へ出るやうなのは、皆このヒステリーの然らしめるところであります。時には夢に見たことを現實の出来ごみ取り違へ、ごんでもない騒動を惹き起すことがあります。我々我身に艶書を送つたり、それから匿名の手紙を他人に送つて喜ぶといふやうなのは、みんなこのヒステリーの然らしめるところであります。

意志もまた、多くの場合障害を受けるものでありまして、いはゞ他人に左右され易くなり、従つて暗示を受けることが多く、かの催眠術に極めてかゝ

り易いのであります。この催眠術にかゝり易い性質が精神分析を行ふに大へん都合がよいのでありまして、すでに私はその一例を述べましたが、催眠状態に於てその人の過去の生活に於ける特殊の點を發見すれば、それによつてヒステリーの治療を行ふことが出来る譯であります。

ヒステリーの際には屢々朦朧状態を稱して、一時的の意識の消失を起すことがあります。これが所謂ヒステリーの發作を稱するものでありまして、その際單に人事不省に陥るばかりでなく、時には全身の筋肉の激しい痙攣を起します。又しばしばこの朦朧状態から夢遊状態に移り無意識にいろいろの犯罪行爲を行ふことがあります。かの萬引の如き犯罪は、この朦朧状態に行はれるのが一番多いと云はれて居りますが、ごにかくヒステリーの精神状態は實に千變萬化でありまして、いはゞ容易に捕捉しがたい

ものである云つてよいのであります。

次にこれ等の精神的障害の他に、ヒステリーは肉體的障害をも伴ひます。これも又極めて多種多様でありまして、先づ普通に見られるのは、胃腸の障害、それから全身の筋肉の障害、例へば歩くこゝが出来なかつたり、ものが云へなくなつたり、呼吸が出来なくなつたりして、一寸見るに恐ろしい大病のやうに見ゆるこゝがあります。而もそれらの障害は、毎日／＼移り變つてゆくのでありまして、今日はものが云へなくなつたかと思ふに、あすは下痢を起し、明後日はすつかり歩けなくなるに似ふ有様であります。尙又全身のこゝろ／＼の感覺が無くなり、所謂手足がしびれたやうになつて、殊に痛覺が目立つて無くなります。

この他まだ肉體の障害は、ミても擧げ切れぬ程澤山ありますが、いづれも

患者自身によつて作られるのであります。前にも申しましたやうにヒステリー患者は他人の暗示にかゝり易く、たゞへば下痢に悩んでゐるヒステリー患者に向つて「あなたはあすは胸が痛みます」ミでも云へば、翌日必ずはけしい胸の痛みを感じます。他人の暗示にかゝるばかりではなく、自分の暗示にもかゝり易いのですから、所謂われミ我身で症状を拵へてゐる點は慢性病者のうちヒステリー患者に一ばん著しいのであります。

實際ヒステリー患者は、各種の症状を作るばかりでなく、時ミしては理窟を超越したやうな妙な考へを持つこゝがあります。例へば胸の中に大きな玉が出来たミいふやうに考へたり時には腹の中に蛙が宿つたミいふやうなこゝをいひ出します。しかも本人は眞剣なのであります。だから左様な患者に向つて、決してさう云ふやうなこゝは無いミ説き聞かせたミこ

ろが何んの役にも立ちません。蛙が宿つたミ信じた患者は蛙が飛び出したミ信じる迄は、体内の苦悶に悩みつゞけます。そういふやうな場合、醫者が吐劑を與へて食物を吐かせ、ひそかに蛙の死體をその中へ入れなごして患者に見せるミ、患者は初めて納得するのであります。

これは洵に極端な例でありますけれども、すべてのヒステリーの治療には、必ずこのコツを應用しなければ成りません。神経衰弱者は懷疑的であるかはりに、子供だましには乗りませんが、ヒステリー患者は立派に子供だましに乗りますからそれによつて症状を驅逐するこゝが出来ます。

この點に於てヒステリーは、神経衰弱者よりも醫者の力をあらはし易い譯であります。神経衰弱者の心を一定の方向に向はしめるのは可なりに骨が折れますけれども、ヒステリー患者の心を一定の方向に向けるのは比較

的容易なのでありますから、醫師たるものはこゝをうまく利用すべきであります。

三、慢性胃腸病

慢性胃腸病は慢性病の中最も多くを占めてゐるだらうミ思ひます。前にも申上げました通りに、神経衰弱やヒステリーの際には必ず胃腸の障害を起すものであります。その他の慢性の病氣にも多少の胃腸の障害を伴はぬものは先づ、無いミいつて差支へありません。尙又急性の病氣に際しても、胃腸は必ず冒されるのであります。食慾の不振はすべての病氣に共通するものであるミ言つても差支へありません。だからみんな病氣に罹つても、醫者は必ず消化劑を用ひます。ある大學の内科の教授に向つて、その指導を受けてゐた醫員が、いよく、郷里で開業するミて、先生の揮毫

を乞ひ、何か日頃開業醫として眷々服膺すべき文句を書いてほしいと頼むと、その教授は快く筆をこつて、肉太に「重曹苦味丁幾」の六字を書いたといふ話がありますが、全く重曹苦味丁幾の使用さへ心得て居れば、立派に内科醫として立つて行くこゝが出来るのであります。急性病に際しても多くは、特效薬がありませんから、消化劑を與へて、食慾を振起する位より外に方ははないのであります。又なまじいろくいな藥劑を用ふるよりも、重曹と苦味丁幾を與へて置けば、極めて安全なのであります。

實際、少し熱が高いと直ぐ食慾がなくなります。これは消化液の中に含まれてゐる各種の酵素が、高温度に於てはその作用を鈍らすためであること説明されて居りますが、必ずしもさうとは限らず、熱の時の精神的影響が消化液の分泌を鈍らせたといつても、解釋はつくかと思ひます。いづれにし

ても身體に異状があれば必ず胃腸の作用が鈍りますから、胃腸の病氣といふこゝを中心として考へてみますならば、胃腸病は病氣のうち一番多いであらうと思ひます。

現に多くの人に逢つてみますと、自分で胃が悪いといふ人は可なり澤山あるやうであります。胃腸病には勿論急性のものもあります。食物の量を過したり、或は腐敗した食物をたべるに急性の胃カタル、又は腸カタルを起します。併し急性のものは食物の爲に起されるのでありますから、暫く絶食してその食物を體外に出してしまへば直ぐ元にもぎります。この急性の胃腸病から慢性胃腸病へ移るこゝは有り得ないといへませんが、慢性の胃腸病なるものは、多くは本人の知らぬ間に現れて來るのであります。そうして長い間悩んでゐますと、胃が擴張したり、胃が弛緩したりします。

食物を食べても直ぐ消化しないでいつ迄も胃の中に停滞し所謂胸にもたれる感を起すのが常であります。慢性の腸カタルになります。絶えず腹が鳴つたり下痢を起したりします。そうして患者は毎日、食物に對して

非常に頭を悩まし、謂はゞ病氣にかゝり切るのであります。

胃擴張とか、胃の弛緩症とかは通常胃そのものに病的變化のある所謂器質性疾患のやうに考へられて居りますが、その實胃の働きの變化即ち官能性の疾患を見るべきものだらうと思ひます。そうして胃が擴張したり弛緩したりするのは實は、患者が自分で胃を愛しすぎるが爲に、換言すれば胃を大事にし過ぎる爲にそうした状態を惹き起すのであると思つてよいのであります。

胃潰瘍などは急に起つて、慢性に移るか、或は又慢性胃腸病の経過中に起

りますが慢性胃腸病の経過中に起る胃潰瘍などは寧ろ矢張り胃を大切にすぎた結果だといふことが出来ます。癌の如きものは、その病因が全く不明でありまして、その治療は極めて困難とされて居りますが、これとても精神的の影響が病氣に多少關係してゐぬことは保證出来ないと思ひます。

さて二三の器質性胃腸病を除きまして、あとの大部分の慢性胃腸病は前にも申しましたやうに患者の主観から生ずると思つて差支へありません。たゞ器質性の起因を持つてゐるにしても慢性に経過する胃腸病は悉く患者がこしらへ上げた胃腸病であると言つて差支へありません。胃痙攣の如き激烈な症状を有するものでも實は患者の迷妄のために起る場合が屢々あります。

盲腸炎の如きものは、はじめは急性に起つて、手術して取らない限り、いつ

までも患者を悩むのが普通でありまして、これなどは立派な器質性の病氣でありますけれども、それでも所謂慢性になつたものは、さういふ言ふ患者自身に責任があるのではないかと思はれます。

なんと言つても胃腸病で一番多いのは消化不良であると思ひます。消化がよければ胃腸病でありませんから、それは當然なことも知れませんが、併しこの「消化不良」といふ言葉は、可なり多くの患者を悩ませてゐるだらうと思ひます。一度醫者に消化不良と言はれたが最後、最早患者はその言葉に囚はれ、その觀念に囚はれ、何かの機會にその觀念が轉換されるのでなければ、永久に消化不良が続くのであります。

元來人間の器官は、自然の状態に於ては、働かう／＼致して居ります。生命といふものは、いはゞ外界に對する生物の權利の主張でありまして、總

ての生物は一刻も休むところなく活動し、増殖して居ります。恰度天體が一刻も休むことなく運動を續けてゐるやうに、生命も又働き進むことに全力を注いで居ります。だから私達は成るべく器官を働かせることに苦心をしなければ成りません。器官に故障が起きた場合、一時の安靜をはかるのはその器官を回復せしむる方便にすぎないのでありますから、いつ迄も器官を働かせずに置くといふことは、その器官を弱らしめるに役立つのみであります。これは胃の病に限つた譯ではありませんが、特に胃腸病に際して、その治療の際胃腸を休めよう休めようとするこゝが一般に行はれて居りますから、こゝに注意をして置く譯であります。

患者は第一に自分自身の暗示によつて、胃腸を弱らせます。自分の胃腸が弱いものだと思つたが最後胃腸は決して働かうまはしません。然るに

慢性胃腸病者は悉く自分の胃腸が弱いものであると諦めて居ります。恰も人間の器官は先天的にその運命を左右されてゐるかのやうに思つて胃腸が弱いと信じた人は、その胃腸を強くする心になりません。

だから第二に、成るべく胃腸の負擔を経くしてやらうと思つて消化劑を與へたり、或は又種々雑多な藥劑を與へて胃腸を大事にしようとするのであります。畢竟するに、それは考へ方が根本的に間違つてゐるのであります。胃腸が弱かつたならば、それを強くする方法を講じなければ成りません。人間の身體といふものはこれを巧みに發育せしめたならば、いくらでも強くなります。だから學校教育に於ては體育といふことが、可なりに重要視されて居ります。ある意味からいへば、いくら知識が發達しても、ただが弱くては何にもなりませんから、體育は學校教育の第一位に置かれな

くては成りません。

體育に依つてからだが強くなるものであるといふことは誰でも知つてゐる事でありますが、多くの人は、體育といふことは身體の外部の器官即ち主として筋肉を發達せしむるにすぎないやうに誤解して居ります。そして内臓なるものは筋肉と異つて、練習によつて筋肉程目立つて強くはならぬやうに思つて居ります。これは洵に無理もないことで、筋肉はその發育の程度が一目で分ります。これ共、内臓は身體の内部に隠されて居りまして、發育の如何を外部から知ることが出来ない爲に練習によつてそんなに強くなりさうには思はないのであります。

けれどもこれは根本的の誤りであります。内臓も筋肉や骨格とひとしく、それを巧みに鍛ゐることに依つて、いくらでも強くなるものであります。

ところがその意味がさうも普通の人には理解出来ないやうであります。筋肉が細かつた場合、それを太らせるには何人も筋肉をよく使用致さうと企てますが、内臓が弱つた場合には、一も二もなく成るべく使はないやうに工夫致します。これが即ち慢性胃腸病のいつ迄も治つて行かぬ譯でありまして、少し靜かに考へを巡らせたならば常識によつて容易に理解出来ることなのであります。だから慢性胃腸病者は、病を治すことのみならず、いかに胃腸を強くするかといふことに心を傾けねば成りません。自分の胃腸は弱いから到底強くすることは出来ぬといふ觀念を捨て、用ひ方によつてはどんなにでも強くなるといふ信念を得て病に處して行かねば成りません。

一度胃潰瘍なごに罹りますと、その後は極端に再發しやしないかご惧れません。

て益々食物に注意をし、あらゆる手段を講じて胃を大切にしようごしますから、病は却つて再發し易くなるのであります。胃潰瘍の如きものは、吐血をするため、その恐怖が他の胃病よりは一層甚しく患者は極端に病を懼れて二六時中胃の事ばかりを心配して居りますために、胃の働きはいよゝゝ鈍り再發する機會は益々多くなります。ごに胃潰瘍から癌を起しやしないなご云ふごを聞かうものなら、もう既に癌の初期に見舞はれてゐるかのように恐怖を抱き、益々身體を衰弱させてしまひます。

腸の神経性疾患の如きになりますと、甚しいのになるご三十分又は一時間毎に下痢を起しますけれども、一體さういふやうなごは少し靜かに考へてみましたならば、自分の精神の誤りであるごが、すぐ氣付かねばならぬ筈であります。一時間目に下痢が起ると信じ切つてゐる爲に、剛へ行か

ねば居れないのでありまして、こんなものは無理にでも辛抱させれば二時間でも三時間でも一日でも持つのであります。

ですからたゞひ急性から慢性に移つたものでも、或ひは又器質性のものでもあつても、それが慢性の経過を取つた場合には、必ず患者の精神が病をこしらへて居るのだと考へてよいと思ひます。さうせ慢性病なるものは普通の醫藥で治らないものでありますから、たゞひ間違つて居つてもさう考へて主觀を變へることに努力してみたならば、きつこよい効果を得るに違ひありません。さうして一たん主觀が變化したならば、たゞひ器質的のものであつても、自然に治癒して行くであらうと思ひます。一般に、慢性病者が難治と不治とかの觀念を持つ程恐ろしいことはないものであります。數年來の慢性胃腸病といへども、觀念を變更することに依つて短日月に

これを驅逐するこゝが出来らうと思ひます。

四、肺 結 核

肺結核は結核菌の寄生をその中心とする一つの慢性病であります。よく肺結核は患者の體質から持ち出す病氣であるを考へられ、結核菌の寄生なきは眼中に置かれぬやうなこゝがありますが、結核菌のない結核病は存在しないのでありまして、結核菌の性質を無視して治療を行ふこゝは誤つてゐるといはねばなりません。けれ共結核病を他の急性傳染病の如く、病原菌を體內から除かうとする治療法に依つて處置しやうとするのは、少くとも現代の醫學的知識の程度に於ては當を得てゐるまいへません。前にも申しましたやうに、結核の化學的療法なるものは、一つも成功しては居りません。尙又結核の免疫血清療法と或は又ワクチン療法なるものは、

されも皆効果がありません。第一結核の際に他の急性傳染病に見るやうな免疫體が人間なり動物なりに發生するかさうかさへ、まだほんさうに分つてゐないのであります。尤も結核の免疫さいふことはあり得るを考へられ、また免疫體なるものも、或る一部の人の人により立派に證明されたやうにいはれて居りますけれども、少くも、結核の免疫血清によつては、慢性肺結核を治すことは出來ないのであります。

皆さんも御承知のごまく成人の殆ど悉くはかつて多少の結核の症狀に見舞はれて居るのであります。それ程結核は人類にまつて普遍的な病氣でありまして、たゞその少數の人が所謂肺結核さいふ診斷のもまに一種の慢性病に悩むのであります。

まところが一たん肺結核の診斷を下されますま、患者は多くは自分が今迄

持つてゐたまを知らないで、はじめて恐ろしい病氣に罹つたやうに考へます。而も肺結核は他の慢性病よりも、死亡する數が目立つて多いのですから、一層患者は恐怖するのであります。尙又患者は肺結核に特效藥のなまいさいふまを知つて居りますま爲に、いよくもがき苦しむのであります。

肺結核でも時まして極めて急速な経過を取ります。又慢性な経過のある時期に、突然急性のものに變るやうなまがあります。が、多くの場合その發生は極めて徐々でありまして、それから徐々に経過し、徐々に悪くなるのが普通なのであります。そこで私達が考へねば成らぬまは、ある場合に急性の経過をまつたり、或る場合に慢性の経過をまるとはさういふ譯であるかまいさいふまであります。これ迄の多くの醫學者は、さういふ経過をまると肺結核の特徴であるま、所謂有るが儘に觀察して、それ

に依つて結論を下さうとしたのでありまして、理由の穿鑿になるに甚だ曖昧なのであります。人は多くの場合結核は慢性の経過をこるものであるに信じ切つて居ります。そうしてこれは病の性質がさうならしめるものだに信じ切つて居ります。けれ共よく考へて見るに、もし茲にある治療法の大家が出て見事に結核を治すこゝが出来るか或は何かの手段を講じて短日月に治すこゝが出来るとなつたならば、最早それは慢性病では無くなつてしまひます。ですから私が思ふに、少くも現今の患者の大部分は結核は慢性に経過するものであるに信じてゐるその信念が彼等の病氣を慢性たらしめてゐるのでないかと思ひます。いつの間にもや、結核は治りにくいもの、長い経過をこるもの、みんなが信するやうになつてしまつた爲に、その信念が結核患者を迷はして病を長びかせるこゝはあり得るこ

とだと思ひます。たまたま結核に罹るに死刑の宣告を受けたやうに考へるのも畢竟それは一種の誤解に過ぎません。結核といふものは治りにくい、遅かれ早かれその爲に生命を取られるのだといふ信念は、醫師に診断を下された刹那に、その患者にへばりついてしまひます。さうしてその信念は一たんへばりついたが最後それを抜き取るこゝは容易ではありません。結核は治療すべきものであるに説いて統計を示しても、患者は治療しない實例をもつてそれを否定しようとしません。他人は治るかも知れぬが、自分の病氣は治らぬかも知れぬといふ何の根據もない感じに依つて、自分の病氣が治りさうには思はれなくなるのであります。尙又多くの療養書に初期は治り易いといふこゝが書かれてある爲に、所謂二期三期の人はこゝも助からぬものであるといふ信念を得ます。この信念が初めからしまひ

まで患者に頑強にくつゝいて居ります。

ところがさうせ助からぬと思ひ乍ら、患者は藥劑を購つたり、いろいろな治療法を試みて居ります。死を覺悟したさいひ乍らも、一方で藥をのんで居ります。これなきは畢竟患者の思ひ違ひから起るこゝでありまして、結核が慢性病であるさいふ信念さへも見様によつては誤つて居るさいいつて然るべきであります。結核が慢性病であるのは寧ろ患者の迷妄が主として慢性病たらしめて居るのだと考へるのが至當でありまして、さう考へた曉には結核の治療は極めて容易になるのであります。

慢性胃腸病の如きは別に細菌が寄生して生ずる譯ではありませんから、患者の觀念の誤りがその重なる原因となるのだといつてもさほゞ理解しにくくはありませんが、結核の如きものはさうもさういふ風に思へないのが

常であります。併し病は全身の一種の衰弱が基となつて發生するものでありまして、肺結核の如きはその衰弱が結核菌の肺に寄生する事實によつて表現されてゐるさいいつて構ひません。而もその全身の衰弱なるものは常に他の慢性病と同じく患者の誤つた考へ方によつて導かれるのでありますからして、患者がその病氣に對する考へ方を變へたならば、やがて各器官の活動を促し、肺に寄生してゐる結核菌をも驅逐するこゝが容易なるのであります。

青年時代に於ける肺結核が、肺結核死亡率の最高を示して居る事實の如きは、結核さいふものは青年患者を殺し易いもののだとさいふやうに考へないで、青年時代は病をこしらへる力が一番優れてゐるからだとして考へてみる必要がありはしまいかと思ひます。

神経衰弱の如きも青年時代に極めて多いのでありまして、神経衰弱者の各種の症状なるものは多くは患者の誤つた考へによつて拵らへられたものであるといふことを前に述べましたが、それと青年の肺結核患者が一番多くの死亡率を持つてゐることを考へ合せてみますと、所謂思ひ半ばに過ぎるものがありはしないかと思ひます。無論これは私自身の獨断的な考へ方でありませぬ、何故に青年時代の結核が他の時代の結核よりも危険であるかといふことを説明するに、青年時代の體質が結核菌の繁殖に都合がよいのだといふやうな説明では私は満足出来ないのであります。

青年時代はすべての細胞が潑刺して働いて居ります。だから常識で考へても青年時代の結核が一ばん治りよいのが至當であります。それにも拘はらずこの時代に結核の爲にたふれる數が一番多いといふことは何

か他に理由があつてもよいであらうと思ひます。

その理由を私は青年時代の精神状態の如何に歸したいと思ふのであります。若い人程死にたくないのは當然の事であります。所謂血氣にはやる色々の心が病氣といふことに依つて阻止せらるゝ煩悶は他の時代よりも遙かに大きいのであります。想像力が一ばんよく發達してゐる爲に、迷妄に陥るここが大きいのであります。これ等のことが依つてたかつて青年患者の結核を危険ならしめるものではないか、私は考へるのであります。學業の中途にある患者が、友達の進級に限りない焦躁を感じるのには到るどころに見られてゐる現象であります。結核患者は出来もしない癖によくいろいろな計畫を立てる、いはれそれが結核患者の特性のやうに言はれて居りますが、要するにそれは空想の然らしめるどころであります。

青年時代ほご心の動搖が甚しい時はありません。青年患者の結核に對する態度を見ますと、ある時は病に對する一種の憧憬を感じ、ある時は又病を非常に恐れて絶望を感じます。たゞへば有名な人士が結核に悩んで居つた事なきを聽きますと、結核であるが故に自分もその名士にあやかることが出来るだらうといふやうな果敢ない望を抱きます。誰がいひだしたか分りませんが、結核に罹ると頭腦が明晰になる云ふ、極めてあやふやな俗説がありますが、時としてこれが青年患者を一種の誇大妄想に陥れることがあります。若し結核患者の頭腦が眞實に明晰になるものであるならば日本の國なきは忽ちに賢人國になつてしまはねば成りません。結核に悩む名士は必しも頭腦が明晰であるが爲に結核に罹つた譯ではなく、又結核に罹つた爲に頭腦が明晰になつた譯でもありません。偶然たゞ頭腦

の明晰な人が結核にかゝつたといふに過ぎないのであります。

かういふ工合に何事にも一種の變な考へを持ち易いのは青年時代の特徵であります。従つて青年時代の患者の結核に對する態度を見ますと、結核を治さうとするのだやら又は結核を重らさうとするのだやら譯が分らないのであります。轉地療養をする場合にも病のために轉地するのではなくて、海に對する安價な憧れとか、或はあはよくば海邊の純朴な少女に戀の一つも仕掛けることが出来はしないかといふやうな心を持つて出掛けます。ですから病はなか／＼去つて行きません。無論海に憧れるのもよく、戀をするのもよいことでありまして、それが爲に病が治る場合があるかも知れませぬけれども、とにかく青年の病氣に對する態度は慢性病治療の原則から遠ざかり易いのが常であります。徒らに自分の悲運に涙を流し後

には世の中の制度を呪ふやうなさもしい心をも起します。結核に罹つた青年患者がブラック・リストに載り易いのも、要するに思想の動搖しやすい事を、従つて病を驅逐する資格の乏しいこゝを語るものゝ認むべきであります。

然らば思想の動搖の少ない、至つて無邪氣な子供は、結核でたふれるこゝではないかといふこゝ、これは決してそうこゝは限らないのであります。こゝが結核の神経衰弱や慢性胃腸病なきこゝ違ふ點でありまして、細菌の寄生をその中心としてゐる以上、たゞ無邪氣なものでも結核にたふれるこゝは申す迄もありません。モルモットが結核でたふれるのも人間の小兒が結核でたふれるのも、精神的の影響に因らないこゝはいふ迄もありません。が、少くも、青年以後の精神が他の慢性病と同じく患者の主観によつて導か

れて居るこゝは確かだと思ひます。子供に慢性胃腸病が無いこゝを考へてみますと、この邊の消息は明かになると思ひます。子供の胃腸が健全だからといつてしまへば、それ迄であります。然し私の今迄述べたこゝを理解して下さつた皆さんは、たゞそれだけでこの現象を説明すべきものではないと思はるゝに違ひありません。

結核は慢性胃腸病なきゝ、違つて結核菌の寄生といふこゝが合併してゐるために、そこに患者の考へを益々混亂せしめる原因が生ずるのであります。小兒の如き無邪氣のものでも結核でたふれるから、いかに精神を無念無想に保つても結局は助からないではないかといふやうな考へを抱く人は少くありません。尙又結核は細菌の寄生を伴つてゐる以上他人に傳染せしめやしないかといふ恐れや他人に嫌はれはしないかといふ僻みがあ

ります。その他、結核菌毒素のために起るこいはれる發熱、或は又不愉快な
症状なる咳嗽、咯痰、これ等の事情が患者の精神をますく鈍らせ、いよく
迷はせる原因となるのであります。慢性胃腸病者の如きは、別に他人に傳
染しない爲に、氣兼ねをする必要もなければ、又嫌はれるこもありません。
唯自分だけが苦しんで居ればそれで片がついて行きます。ですから慢性
胃腸病患者は結核患者よりも悩みの少ないのが普通であります。もつこ
も前にも申しましたやうにすべての慢性病者は自分がいかなる種類の病
氣よりも、又同じ病氣の他の人よりもはげしく苦しんでゐるものこ自覺し
て居りますから、かうしたこを私が述べますこ、不賛成人があるかも知
れませんが、こにかくそれは常識で考へても分るこであります。實際結
核患者の大部分は、結核菌の問題に悩んでゐるのであります。結核を他の

病氣よりも治りにくいやうに考へたり、或は又他の病氣は死こいふものこ、
大分遠ざかつてゐるやうに考へるのであります。それもまつたく無理の
ない話で慢性胃腸病者のごときは胃腸の悪いための苦しみをよく訴へて
も、直接死の恐怖を感じるこが鈍いやうに見えます。けれども繰返して、
言ふ通り結核は大部分患者の迷妄が作用して全身の機能を衰弱せしめ、そ
の虚に乗じて結核菌が繁殖して行くのでありますから、矢張り考へ方をか
へさへすれば、他の慢性病こ同じやうにその治療を促すこが出来るこ思
ひます。少くも主觀を變ずるこに依つて結核の病勢を喰ひ止めるこ
が出来るのであります。この點を誤解しないで結核患者がその病に處
して行くならば結核は決して恐ろしい病ではないのであります。

五、其他の慢性病

慢性病の一々に就いて説明することは到底この短い紙面では不可能の
ことでありますから、以上述べた慢性病以外のものに就いてはたゞ簡単に
述べて置かうと思ひます。所謂各種の「持病」を稱するものは皆これに屬
するものでありまして、先づ呼吸器に關して云ふならば、慢性氣管支炎、喘息、
慢性肋膜炎の如きものがこれであります。肺結核も慢性氣管支炎に類す
る疾病であります。慢性氣管支炎なるものは比較的老年に多いのであり
ます。然し慢性氣管支炎にしろ、慢性肋膜炎にしろ、矢張りその治らぬ原因
は患者の主觀に求むべきではないかと思ひます。かの風邪をひき易い性
質の如きは、風邪の恐怖が餘程手傳つて居ると思ひます。患者は風邪を引
くまい風邪をひくまいを氣を使つて、部屋の温度を湿度を調節し、又
は寒氣にあたることを細心の注意をもつて避けようとするのであります。

が、寢てゐる時などは、いかに注意しようと思つても、意識が働かないのであ
りますからその間に寒氣に觸れ風邪をひき易いのであります。風邪をひ
き易い性質の人は、しばしば如何にしたら風邪をひかないだらうかと言ふ
ことを醫師に訊ねますが、そうした場合醫師は、部屋の空氣を濕らせ、部屋の
空氣を一定に温め、なるべく寒い風に逢はぬやうにしなさいと言ふに過ぎ
ません。けれ共寢てゐる間、温度を調節するにも、湿度を調節するにも、自分
には出来ないことですから、理想的な風邪防禦法をするには、さうしても自
分に寢ずの番を一人付けねば成りません。さういふ風に考へて行きます
と、さうにも仕様がなくなつて來るのであります。だから寒冒に罹り易い
性質の人は、寒さに對する抵抗を増す方法を講じて、積極的に強い體格を作
つて風邪をひかないやうにするより他に道はないのであります。皮膚を

温く保護すればするほぎ、皮膚は寒氣に對して鋭敏になりますから、益々皮膚を弱くするのであります。又、それと同時に風邪をひき易い性質を持つ人は、自分は風邪ひき易いといふ觀念をさり去らねばなりません。寒いところへ行つた時けふは風邪をひきはしなかつたか、恐れるやうな場合はよく風邪をひくのであります。寒さに逢つた場合、ウシ腹に力を入れて腹壁の運動でも繰返へしてゐる場合には、全身に一種の暖みを感じて、容易に風邪をひくものではありません。よくゾツとした時に風邪をひくといひますが、ゾツとするといふことは、つまり意識の働かぬ状態を言ふのであります。だからあらかじめ覺悟をして寒い目に逢ふ場合には、めつたに風邪をひきません。寒中の水泳の如きまきに容易に風邪をひかないで、ウツカリ靴下なごをぬいだ時に風邪をひくやうな事がありますのは、つまり意

識が働くか、働かないかの違ひなのであります。

慢性肋膜炎の如きも、よく氣候の變り目に起るものでありますが、これなごは患者がその季節に、この病氣を起すのでありはしないか、云ふ恐怖を持つ故に起るものであると言つても差支へありません。いかにも、ある場合には季節の影響があるに違ひありませんが、季節の影響といふやうなごを考へないで置けば割合に再發はしないのであります。

また喘息の如きものは、よく寒い時に起つて患者の苦しみは絶大であります。偶々注射を致しましても、それは單に一時的にその發作を靜めるだけでありまして、喘息の起るやうな體質を改良しない限り、喘息を治すごは出来ないであります。發作ばかりを目當に治療を施すのは何の効果もないのであります。喘息が交感神経系と關係のある事は言ふ迄もなく、

その交感神経系の緊張をやはらげる薬劑を與ふれば、一時は患者の苦痛を軽減するこゝが出来るかも知れませんが、何しろそれはたゞ枝葉の問題を取扱ふだけで、根本に遡りませぬから、喘息は依然として難治の病なのであります。さうしても患者自身が精神的の改革を行つて體質をかへるか、或は奮然として喘息發作の苦痛にたゐるか、尙又喘息は治りにくいといふ觀念を捨るかするより他にゐるべきよい途はありません。

リユーマチスの如きは、かなり多くの人を悩めます。その原因は或は微菌の作用だといひ、或は又その他に複雑な原因があるといはれて居りますが、要するに慢性リユーマチスを治す薬といふものは無いのであります。だから慢性リユーマチスに悩む患者は、その苦痛を脱れやうとあせるよりも、苦痛にたへる覺悟を持つた方が得策なのであります。温泉へ行つて比

較的病が軽減されるやうに思ふのは、温泉がリユーマチスにはよいといふ暗示が大いに與つて力あるのであります。リユーマチスに似た痛風は西洋には極めて多い病でありまして、英國なごでは可なりに多くの患者がこれに悩んで居りますが、やれ血液内の尿酸の量がさうの、或は又何んごかいふ成分がさうのと言はれて居りますけれども、それを知つたところが、さうにも治療法はないのであります。英國の十七世紀の内科醫シデナムは自ら痛風に悩んで、痛風に關する名著を残しましたが、その中に書かれてあるところを見ますと、痛風の如き難病に對しては、是れを治すこゝにあせるよりも、その苦痛に如何にして堪へて行くかを考へるべきであるといふ説いて居ります。これは實に我意を得たこゝでありまして、實際慢性病者が苦痛に耐ゆる稽古を致しましたならば、慢性病の数は著しく減するであらうと思ひ

ます。

神経痛の如きも極めて治りにくい病氣であります。サルチル酸の製剤によつて、ある程度まで其の苦痛を減ずるこゝが出来るといはれて居りますし、然乍らそれによつて、神経痛を治すこゝは出来ません。だから患者は治すこゝにあせらないで苦痛に耐へて行くこゝ云ふ覺悟で暮すべきであります。私はさきに慢性病者が藥をのむこゝを笑ひましたが、慢性病の苦痛に耐へて行くこゝいふ意味で、藥劑をその補助としてのみならずは差支へないのであります。藥をのんでも治らぬこゝ愚痴をこぼすのは間違つて居るのであります。慢性病者が藥をのむに當つて、生活に善處する爲に考へたならば慢性病の問題は大へん解決し易くなるのであります。人間は生きてゐる以上働かねば成りません。その時に當つて、働くこゝを邪魔せよ

とする苦痛を藥劑によつて除きつゝ進むこゝは推奨すべき態度であると思ひます。所が多くの人には「生活」こゝいふやうなこゝは考へないで、病氣そのものに掛り切つて居て藥を呑むために、歎はしい現象を生ずるのであります。病氣に掛り切つて一生を暮すこゝは洵に恐ろしいこゝであります。私達は一日も早く病氣は病氣、生活は生活こゝいふ風に區別を立て得る状態に到らなければ成りません。持病あるが故に、あたは、人生を浪費する人は少なくないのであります。病氣に掛かづらつてゐる間に、月日は容赦なく立つて顧みて恥多い一生を暮らすこゝになつてしまひます。この邊のこゝをよく考へて、慢性病者が「意義ある生活」こゝいふこゝに心を向けたならば、それはやがて慢性病を驅逐するよすがともなるのであります。

糖尿病とか慢性腎臓炎とかの如きものも、病因に就いての所謂醫學的穿鑿は、可なりに行き届いて居りますが、その治療に至つては實にはかないもの、言ふべきであります。だから、少し位の糖の出ることに心をくさらせて、恐怖のうちに生活するといふことは實に情けないことであると思ひます。捨て、置けば知らぬ間に治るべきであるのに、それを氣にする爲いつ迄も持病となり患者の苦痛の種となるのであります。

これを要するに、原因の醫學的穿鑿は、ミにかくミして、慢性病の多くは患者の主觀が働いて、病の経過を長からしめつゝあるのだと言ふことが出来ます。然るに從來の治療法はその所謂醫學的原因に對する處置か又は症状の軽減を期する處置にすぎませぬから、なか／＼持病は治らないのであります。私は次章に、現今慢性病が如何に治療されつゝあるかを述べたい

と思ひます。

第五章 現今の慢性病治療

さて私はこれから、現今慢性病に對して、どんな治療法が行はれてゐるかを述べようと思ひます。早い話が、病の原因が分れば、その原因を取り除きさへすれば病は治る筈でありますから、今の醫學では出来るだけ詳しくその原因を詮索して、その病氣を治さうとするのであります。ところが病の原因なるものは、ある種のものを除いては非常に複雑して居りまして、容易にこれを明かにすることが出来ないであります。従つて現在の醫學的智識の範圍に於ては、たゞこの病の原因はかうであらう、あの病の原因はあゝであらうと推定するに過ぎないのであります。それ故、その治療に當り

まして、いはゞめくら減法に、さぐりを入れてゐるのに過ぎないのであります。又たまゝ原因が分つたましましても、その病をさうするこゝも出來ない場合があります。そう云ふ場合もやはりかうしたらいいだらうか、あゝしたらいいだらうか、同じくめくら減法に色々な試みをしてみるだけのものであります。

急性病のあるもの、例へばマラリヤの如きものであります。マラリヤで見事に治りますが、併しキニーネがマラリアにきくこゝはマラリアの原因を知らなかつた以前に、いはゞまぐれ當りに発見されたのであります。また慢性病の内でも梅毒の如きものはその原因の分らない先に、水銀劑が特效を持つこゝいふこゝが、これまたまぐれ當りに発見されたのであります。

如何に醫學が進んだと言ひましても、そうして又多くの病原が発見され

ましたまゝ云つても、その治療に到つては大部分まぐれ當り式な方法しか講ぜられてゐないのであります。肺結核の原因が肺結核菌の寄生に基くまわかつて、その菌を追ひ出す方法はありませんから、従つてその治療法はまぐれ當り式のものなのであります。而も不幸にして未だ一つも的にあつた薬剤は発見されて居りません。

斯う言つたからこゝいつて、私達は、前にも述べた如く醫學的智識そのものを輕蔑してはなりません。醫學的智識を持つて居ない所謂非醫者の連中は、病の治らぬの故を以つて醫學の明かにし得たこゝ迄も、否定しようとする傾向がありますが、そう云ふ態度は間違つてゐるまゝ云はなければなりません。尤も科學的智識なるものは、絶対に正しいものまゝ云ふこゝは出來ませんが、それでも、人類が長い間經驗し築き上げて來た智識を、直觀的獨斷を

以つて排斥すべきものではないと思ひます。かう云ふ前に醫學的智識は當てにならぬと言つた私の言葉に矛盾してゐるやうに考へられるかも知れませんが、慢性病を治すにふ上からは、智識を故意に無視する必要があるけれ共、その治療を實行する迄には一通りの正しい智識を得てをかねばならぬと思ひます。つまり始めから智識を無視しないで、その智識をよく検討した上で故意に無視する必要があるのであります。

ところで現代の慢性病治療の有様を眺めてみますと、多くの醫者は醫學的智識をどこまでも尊重して、出来るだけそれに依つて慢性病を處置しようとして居ります。即ち慢性病の際には、唯診断によつて、眼についた器官の症狀を主として、それに對する方策をめぐらさうとするのであります。例へば胃腸が悪いと診断すれば、胃腸を活潑ならしめる薬や、消化を助ける

薬を與へます。これは一應尤もな方法でありまして、誰が考へても不思議なところではありませんが、決して慢性の胃腸病はさういふ方法では治つて行かないのであります。又肺が悪くて咳が頻りに出る場合には、なるべく咳を鎮め、痰の出よいやうな薬を與へるのであります。これは當然過ぎるほご當然のところですが、それによつてその症狀は一時鎮まるかも知れませんが、病そのものは中々治つて行きません。

然し乍らある病氣に於ては症狀そのものを追ふように心掛けて居りますと、その内に病は自然に治つて行きます。これは即ち自然治療力の働く結果でありまして、つまり殆ど總ての病氣に於ては醫師はたゞ、自然の治療力を補助するに過ぎないのであります。即ち症狀を驅逐して居る間に病は自然に治つて行くのであります。急性病の際に心臓が弱くなつた時、心

臓を強める薬劑を與へて居ります。そのうちに自然治癒力のために病は治つて行くのであります。ですから慢性病の際にも、症状さへ驅逐して居れば、病は自然に治るであらう。誰しも考へます。ところが、急性病の際には自然治癒力はみごみに働いても、慢性病の際にはちつとも働かないやうに見ゆるのが常であります。まったく慢性病がいつ迄すぎても治らぬのは、自然治癒力が十分働かないからだ。考へても、差支へはないのであります。してみると、まるで自然治癒力には病氣によつて働く場合も働かぬ場合がある。考へねばなりません。常識でもわかる。まほり自然治癒力はいかなる場合にも働かう。とするのであります。

然らば慢性病に於て、自然治癒力がなぜ働きにくいのであるか。いふ疑問が起つて來ます。その疑問に對する答へは唯一言にしてこれを盡すこ

とが出来ます。即ちそれは患者の主觀が、自然治癒力の働きを阻^{さまた}けてゐるかからであります。慢性病者は自分の主觀で、病をこしらへつゝある。と同時に、その主觀によつて、病を治さうとする力を阻止しつゝあるのであります。病を自分で作る。いふことは、一方から云へば自分の治病力をも信頼せぬ。いふことになりませんが、外力にのみ頼つて自己を失はうとする場合には、自己に備はる治病力は勢ひ働くことが出来なくなるのであります。

斯ういふ譯ですから、現代の慢性病治療の状態は、一見合理的であるやうであり乍らその實不合理極つたものであります。即ち慢性の病を急性の病と同じにして、取扱はれんとするところに、慢性病難治の原因があるのであります。

尙又前にも申しましたやうに、患者が病をつくる以上、その症状を目當に

治療を施すまいふこころは間違つてゐるこころはねばなりません。胃が悪い
さいひ、腸が悪いさいふも、その患者の主観の現れである場合には、胃腸を安
静にしたり、胃腸の働きを助けやうさいふ薬の利く譯がありません。尤も
今の醫學の教へるこころに依れば病は外因と内因とに依つて起るのであ
るから、外因だけを目標として其治療を施すこころの誤つてゐるのは總て
の醫者が知つて居りますけれども、いざ慢性病を治療するこころ、目の前
にある症状のみにかまけて、いはゞ外因のみに重きを置いて、その内因を考
慮しないのであります。而も内因なるものは、その個人個人によつて皆違
ふのでありますから、たゞ内因に重きを置いて、治療を講じても一般的な
取扱ひ方を各患者に施してゐたならば、病は治る筈がありません。同じ症
状を現しても、甲と乙とに依つてはその原因は違つてゐるべき筈です。た

まへば肺病の如きは、その外因とも云ふべき結核菌の寄生とさいふこころは、總
ての人に共通して居ります。又その人の體質が結核に罹り易い體質であ
るこころも、すべての人に共通した内因であります。だから總ての肺患者に
同一の療法を試みてよいと思ふのは無理はありませんけれども、その實さう
ではないのであります。甲の人が結核に罹るためには甲獨特の深い原因
があり、乙の人が結核に罹るためには乙獨特の深い原因がなくてはなりま
せん。又同じ病氣でも、男と女によつてはその原因が根本的に違つて居り
ます。更に又、青年は青年、老人は老人でそれによつてその主観が違つて居るこ
同じく、その現れ方も違ふのでありますから、慢性病に對して平等的な一視
同仁的な處置を施すまいふこころは誤つてゐるこころはねばなりません。
こころが現今の慢性病治療法を見ますと、總ての病人を同一に處置しよ

うゝして居ります。患者の考へや、氣質等は問題にしないで、たゞもう概念的な治療を施しつゝあるだけであります。外國あたりのサナトリウムを見ますと、澤山の患者が同じ場所へ入れられて、同じやうに日光に當てられたり、同じやうな空気を吸はされたりして居りますが、それで治れば幸福ですけれど、甲の人が治つて、乙の人が治らぬといふことはザラにあることだと思ひます。病氣が比較的軽い間は、平等的な處置を講じて、治り易いかも知れませんが、少し病氣が重くなつてまゐりますと、そこに著しい區別が生じて來るのであります。

現今の醫師たるもので、これ位のこゝを心得てゐないものはなく、誰でも出来るならば、平等な治療法でなく、差別的な治療法を施したいと思ふのであります。けれども、なにしる醫者も、醫業に依つて生活して行かなければ成ら

ぬためにつひ／＼平等的な方法を講じて間に合せをしようとするのであります。だから慢性病治療の缺點はむしろ醫學そのものゝ罪ではなく、社會組織の罪だともいへるのであります。患者の身になつてみれば、社會組織の缺陷であるから止むを得ないこと云つて諦める譯には行きません。

併しなから慢性病が難治であるのは、強ち醫者の罪ばかりではありませぬ。既に患者の主観が難治の重大な原因をなしてゐるといふ以上、責任は患者の方にもある譯であります。患者の多くは元來素人のことであり、ますから、自分の主観がそれ程に、自分の病の根元をなしてゐることゝは知りません。だからその點は許すべきであるとしても、缺點とするところは多くの患者があまりにも外界のものに頼りすぎて居ることであり、先づ患者は現代の醫學そのものに頼りすぎて居ります。いろ／＼な科學

の進歩の結果を見せつけられて居るため現代醫學も偉大な力を持つてゐるやうに信じて居ります。その結果現代の醫學で治療が出来なければ、致し方がないミ諦める者もあります。併し、そこで諦めてくれれば大へんよろしいけれ共、中々その場で諦めるこゝが出来ない爲にいろいろの弊害が起つて來るのであります。なんミかして病の苦痛を脱れよう、なんミかして、病の恐怖を脱れようミあせつて、後には愚にもつかぬ方法を試みるために却つて、益々身動きのならぬ深味へ落ちて行くのであります。實際慢性病者程、病氣に關する他人の言説に鋭敏に心を動かすものはありません。

慢性の胃腸病に罹つたものは胃腸病に關する書物なり新聞廣告の記事なり、或は又、醫師、素人の差別なく他人の云つた事に常に心を躍らせます。そうして何か變つた方法即ち自分の今迄試みなかつた方法を知るミ、飛び

つくやうにしてそれを講じようミ致します。だから各種の新らしい名を持つた藥劑が續々新聞なきに廣告され必ず相當の賣れ行きを示すのであります。

それミ同時に嘗て慢性病に悩んだこゝのある人や、或は又悩まないでも病氣に關して平素何か彼か聞き嚙つてゐる人は、現在苦しんで居る人に向つて、親切さうにいろいろな忠告を與へるのであります。そのやうな場合患者は義理立てゞもするつもりか、或は他人の云ふこゝはやらすに於けないのであるのか、兎に角いろいろな方法を試みるのであります。いはゞ慢性病者は、多くの人から、忠告攻めにあつて益々苦しみをふやさうミするかの感があります。中には又自分がある方法を講じた爲に遇然治つたのをその方法がその病氣に有効なものであるミ信じて、他人にすゝめようミす

る人がありまして、そうした場合、多くの患者は尙更それを試みる氣になり易いのであります。けれども繰りかへして云ふ通り慢性病の原因は皆んな個々別々なものでありますから、他人がある方法によつて治つた云つても、それが自己の病氣を治すものには限りません。だからそれを講じて治ればよし、若し治らない場合には、却つて悲觀を大きくするのであります。民間に傳はつて居る多くの薬は、時には相當の效果を持つ場合があるかも知れませんが、たまく、それに依つて治つたやうに見ゆるのは、偶然病の治る時期と一致してゐたを見るべき場合が多いのであります。従つて他人が勧めてくれる有効薬なるものは、少くともその慢性病に對して特效を持つものではありません。特效を持つものであるならば、多くの患者はさつやくにそれに依つて救はれて居らなければならず、病氣は難治でも何んでも

ない筈であります。微毒に對する水銀劑は、民間にすでに使用せられたものであります。水銀劑は總ての人の微毒を治すことが出來ますから、特效薬といふべきであり、従つて微毒治療劑は他にそんなに澤山はありません。ところが、例へば肺病に對するイボタの蟲は或る人には効果があるかも知れませんが、多くの人には効がありません。だから肺病は依然として特效薬を持たぬ難治の病であり、従つて民間薬も非常に澤山あります。若し微毒に對する水銀のやうに、イボタの蟲が肺病に對して特效を持つてゐるならば、誰も皆それを試みて居る筈でありまして、結核は難治でもなんでもない譯であります。

ところが多くの肺患者は他人はさへに角自分の肺病だけは、イボタの蟲で助かるかも知れぬといふ觀念を持つて居ります。前に私は、慢性病患者が

自分の病氣をいはゞ特別な、他人よりも遙かに重いものと思ひやすいといふことを書きましたが、治療の際にも自分の病氣だけは、さういふ民間薬で治ることを考へる弊があります。自分の病氣が他人のものと異つたものであるといふ觀念を抱くことは、前に述べたやうに極めて必要なことでもありますけれども、唯何の理窟もなく無暗に自分の病氣が他人のものと違ふと思ふことは、よいことであるところか、却つて害のあることでもあります。自分自身をハッキリ見つめること云ふことは、慢性病治療の時には缺く可からざることであります。共無暗に他人の言葉を容れて、そうして自分だけその方法で助からうとするのは、その實自己を見つめることではなくて、自己を没却することでもあります。

それ故、慢性病者は外物に對して、安價な信頼心を持つてはならぬと同時に

に、自己自身に對しても安價な依頼心を持つてはなりません、私は慢性病者は自己に還らねばならぬことを既に申しましたが、頼るべき自己は、磨かれた自己でなくてはなりません。言ひ換へれば心を立て直した上の自己でなければ成りません。間違つた自己に頼つてゐたことで、病は決して治つては行かないのであります。

かくの如く、慢性病治療の現今の状態は、醫者の側から云つても患者の側から云つても、その本道を歩いてゐないうらみがあります。醫者は飽く迄も平等的な、對症的な療法を講じようとし、患者はぢつとして醫療を受けることが出來ずに、いろ／＼の治療法に走らうとして居りますから、慢性病はいよ／＼益々難治となるのであります。

而も醫者の對症療法なるものを見るに、症狀の解釋に於て、すこぶる怪し

いどころがあります。醫者は無暗に症状を除かうごしますが、慢性病の症状なるものは、これを取り除くごが果して、慢性病治療に叶つてゐるかきうか、實は頗る疑問なのであります。

例へば熱の如きは、一種の身體の防禦作用の結果として現はれるのでありまして、非常に熱が高くなつた場合、いろいろの害を他の器官に與へるから、これを取り除き自然治癒力の働きを増させやうごするのでありますが、さほご身體に害を及ぼさぬ熱ならば、敢てこれを除かなくごもよい譯であります。結核患者に見らるゝ微熱の如きものは、寧ろ之を計らないで居れば患者自身が氣づかずに過すごがありますから、そう云ふ場合、それを取り除く必要は毫もないご思ひます。又糖尿病患者が尿に微量の糖を出すごは、多くは患者自身知らずに過すものでありますから、さう云ふ場合に

その糖を出ないやうにする爲にいろいろの方法を講ずるごいふごは考へ問題でなければなりません。それにもかゝはらず普通の醫者は、熱があるごいへば、直ぐそれを取り除かうごし、糖が出るごいへば、直ぐ糖の出なくなるやうな食餌をせよごするのであります。それで病が治ればよろしいけれど、ある場合にはちッごも治つて行きません。熱が出た時、解熱劑をのんだごて決してそれは悪いごではありません。又糖が出るから成るべく含水炭素を取らないやうにするごも、あつて差支へはありませんが、しかしいつ迄解熱劑をのんでも解熱劑を止めれば直ぐ微熱が出るごいふやうな場合ごか、或は又嚴密な食餌療法を續けてゐて、元の食餌にかへれば直ぐ糖が出るご云ふやうな場合、尙も執拗にそれらの療法をつゞけるごいふ事は考へ問題だらうご思ひます。ごところが醫者も患者もそれを

不思議にも思はず、例に依つて例の如く、同じこゝを繰り返へすのでありまして、いつ迄待つても病は治らぬのみか、遂には救ふべからざる悲境に患者の陥るのが常であります。尤も別に他に方法がないのであるから、續くだけ長く、月並な方法を講ずるのも、止むを得ないといへば云ひ得るのですけれど、同様な方法を中止して、適當な方法に變へてゐたならば、いつくに病を退治するこゝが出来たかも知れぬと思ふに、甚だ残念なこゝ、言はねばなりません。而も多くの場合患者はそのやうな残念な運命に陥つてゐるのでありまして、知らぬこゝ、は云ひながらも實に同情に堪へないのであります。

世の中が進んで生活が氣忙しくなるに、人間は多くは、外物の爲に引摺られ易いのであります。今の世の中はいろいろ原因で人間が靜かに考へ

る餘裕が少いのであります。健康で生活してゐる間は、それで大した差障りもなく暮して行けますけれど、一度慢性病にでも罹るに、限りない焦燥を起すのであります。そのやうな場合、自己を見つめ、自己に立ち還れば、なんでもありませんけれど、共相變らず外物に頼らうとして居ります爲に煩悶はいよゝゝ大きくなるのであります。救はれる道のないといふこゝがハッキリ分る程恐ろしいこゝはありませんけれど、その恐ろしい目に立ち到れば、はじめて自分自身に還へるこゝが出来ますから、さう云ふ恐ろしい目に出逢つてこそ、漸く慢性病治療の第一歩に踏み入る譯であります。

醫師にしても患者にしても、専門的智識を貴ぶあまり慢性病治療の根本觀念が、だいぶかたよつて來てゐる例があります。これも畢竟は形式に眼をくらすされた結果でありまして、餘りにも人々の常識的判斷がにぶらさ

れて居るのであります。いつぞやある新聞に讀者からの質問として、飢餓が健康のためによいといふ博士があるかと思へば、飢餓は健康のためによくないといふ博士もあるが、我々素人はさう判断したらよいか、と書かれて居たことがあります。この讀者なごは餘りにも形式のために自分の判断力を失つたもの云つてよいのであります。飢餓が健康のためによくない場合もあるでせうし、ある場合には飢餓によつて例へば病的の肥満を治し、健康を増進する場合もあります。そんな事は少し考へれば分つてゐることであり、又それらの博士の言説の前後の部分の考へ合せれば直に理解されることであります。専門的なことになると、常識的見解を加へることを嫌ふせるか、みんなでもない誤解を起し易いのであります。かう云ふことは強ち素人ばかりでなく、醫者そのものも陥り易い弊害なのであ

ります。智識が専門化して行きますと、一つの領域に奥深く入りますために、すべての病氣は自分の専門の智識によつて解決されるやうに考へ易いのであります。例へば多くの神経衰弱者は、鼻の故障を持つて居ります。だから耳鼻咽喉科の先生達は、神経衰弱者は鼻を治せば治るといふ説を立て易いのであります。然しながら、それはよくよく考へ直してみなければならぬことだと思ひます。即ち病因だと思つてゐることは、ことに依るにその病氣の一つの症状であるかも知れませんが、即ち鼻が悪いので神経衰弱を起してゐるのでなく、神経衰弱であるが故に、鼻が悪いのであるかも知れぬと考へる餘地を持たねばならぬと思ひます。又患者の側から云つてみますならば、例へば深呼吸が健康を増進するに聞いて、肺が悪いにも關らず、苦痛をしのんで迄も深呼吸を行ふこと云ふことは無益な

こゝであります。これなきは形式的な言葉を信じてそれを如何なる場合にも應用しようとする弊害の一つであります。かつて私が米國に留學してゐました時分、流行性感冒が猖獗を極めて私の友人であつた某専門學校の教授もこれに犯されましたが、私が見舞に行きますと、既にその唇の色は眞蒼になり、呼吸が促迫して重篤な肺炎の症狀を起して居りました。こゝろがこの友人は私に向つて「僕は二三日前からわざと何も食はずに居るんだ、そうしたならば、微菌は餓死するにちがひないから病氣はきつゝ治る」真面目顔に語りました。この友人は不幸にもその肺炎のために死んでしまひましたが、だゞひ立派な教養のある人でも、素人の中には斯様な考へを抱いてゐる者が尠なくないと思ひます。

慢性病患者も、かくかう云ふやうな僻見を持ち易いうらみがあります。

長い間苦しみますと、前にも云つたやうに、他人の言説に鋭敏に耳を傾け、さうして一段論法により勝手な解釋を試みる人が尠くありません。時にはその療法が何か目新しいものでありさへすればそれでよいと云ふ風に考へます。何か彼か新らしい治療を講じてゐて貰へば、それで満足を得る人があります。殊にコンマーシヤリズムの極端に發達して來た現今では、きんな治療法であつても、お金さへ高く拂へば、それで病氣に利くやうに考へる人があります。高貴藥といふ名前がついて居れば、それだけで満足する患者もあります。だから新聞廣告などで、安い藥よりも高い藥の方がよく賣れるのであります。

病院の如きも、これ等の心——即ち何か彼かたぬず治療がして貰へるこゝいふ事と金を高く拂へば、何か其處に疾病治療に對して有効な結果を見る

であらうといふやうな心が、患者をして好んではいたりたがらしめる原因となり易いのであります。ところが、病院といふ所は多くは慢性病者の苦惱を軽減するかはりに、不安を増さしめる傾向を持つて居ります。急性病に對して病院治療はある場合に頗る有効であります。慢性病者の入院はさちらかといふ患者の不安を高めるに過ぎません。不安あるが故に、病院に入つた患者は、その不安を取り除いて貰へるどころか、益々不安を與へられて居ります。糖尿病の如きものは、病院に入れば嚴密な食餌療法を行つて貰ふこゝが出来るかはりに、検尿も嚴密に行はれ、その結果は患者の恐怖を益々多からしめるばかりであります。つまり總てのこゝが規則正しく行つてもらへるだけ、それだけ却つて難治の病は難治となる譯であります。肺病患者の如きものに對しては、病院は時には有効な結果を見るかも知れ

ませんが、多くは軽い患者が、入院中の重い患者の程度に迄病を進ませられる事になるのであります。

繰り返へして云ふ通り、慢性病はその患者の病氣に對する恐怖が、その主觀を虜にして各種の症狀を誘發してゐるのでありますから、總ての形式的な治療法は要するに、患者の恐怖を増し、従つて病を長びかせるに過ぎないのであります。

之を要するに現代の慢性病治療は、めまぐるしい形式の進歩に禍ひされて、醫師も患者も慢性病の主觀的病因に近づくこゝをせず、たゞその表面的の病狀だけにこだはつて、眞の治療法からは遙かに遠ざかつて居る譯であります。

第六章 各種の精神療法

このやうに現代の醫學が、慢性病に對して力のないものであるを分つた結果、慢性病者の苦悶を取り除くために、各種の精神療法なるものが考へられるに至りました。即ち「病は氣から」といふ原理を應用し、「氣」によつて病を治さうとする術が工夫されるに至りました。人間は肉體ばかりで成立つて居るものでなく、肉體と精神との微妙な調和によつて、生活現象が營まれてゐるといふところから、肉體のみを目當てて治療する現代の醫術に反抗して、精神の力によつて、慢性病を治さうとするのが精神療法なるものであります。従つてこの精神療法なるものゝ原理は洵に我意を得たものであります。しかし精神療法を講ずる人は、醫者に割合に少くて、ごちら

かといふに醫學のこゝを餘り心得てゐない人によつて、試みられてゐるのが常であります。そうしてそれらの人は自分の説を裏書するために、醫學上の新しい學説をもつて來て、その精神療法の根據とする場合が少なくないのであります。このこゝが却つて從來の精神療法なるものゝ割に振はない原因をなしてゐるのではないかと思ひます。例へばホルモンの學説が發表されるに、精神療法とホルモンの學説とを結びつけたり、或は人體生理と電氣との關係が瞭かになるに、精神療法の原理を電氣の方へ持つて行つたりするなごといふこゝがよく行はれ居ります。これ等のこゝは素人を喜ばせるに足るかも知れませんが、玄人に喜ばれる譯はなく、従つて玄人の側からは、一笑に附せられやうとするのであります。

精神作用は、微妙なものであるから、到底現代の科學の力でその全般を明

かにするこゝは出来ないのであります。それ故に精神療法を講ずる場合にも、科學的の理窟をこれに付けるのは至當は謂はれません。こゝが前にも申しましたやうに、現代のすべての人々は、總てのものが科學的に説明せられてないを承知が出来ないのでありますから、精神療法を講ずる人々は、何かそこに理窟をつけて患者の信用を博さうとする傾向があります。これは却つて精神療法なるものゝ値打を下げるこゝ、云はねば成りません。

元來精神療法は、患者の囚はれた精神を常態にもさすだけでよいのであるから、それに種々の理窟をつけたり、或は又いろいろの面倒な術式を講じたりするといふ事は、一つの方便であるに過ぎないのであります。いはゞそんな理窟なり術式なりは、第二義的なものであります。こゝろが精神療

法を行ふ人達の有様を見て居ります。いろいろ面倒なこゝを、患者に行はせて居るために、動もするこゝ一つの片寄つた形式を生み出し、患者の精神を解放するこゝろか、却つて患者を別種の囚はれた精神に導かうとする悪弊があるのがあります。それが爲患者は、現代の醫術の弊害から救はれやうと、別種の弊害に陥れるのであります。このこゝろは、強ち治病上の事に限らず、人間世界の總てのこゝろが、同じやうな傾向を持つのであります。人間の行ふこゝろは、すべて極端から極端へ走り、弊害を重ねるこゝろが少くありません。ですから先哲は、何事にも中庸を得るやうに教へられました。こゝろに慢性病治療の際に當りては、慢性病の爲に一種の迷妄に陥りつゝある精神は、なほさら冷靜な判斷力を缺き、いよゝますゝ患者を極端な迷妄に導き易いのであります。

殊に宗教に治病が結びつけられる時、こゝに申上げたやうな弊害は著しくなります。ある宗教では、病は患者の心の迷ひから現れるものだと言明して居ります。何病も一種の我慾の發現であるから、その我慾を壓へ心の間違いを訂正すれば病は治ると説明して居ります。この考へ方は一應尤もであり、所謂懺悔の心によつて、病苦を退治する方法は大へん推賞すべきではありませんが、あらゆる病の原因を一種の心の異常に歸せしめ、それによつて治病を圖らうとするところは、必ずしも當を得てゐないと思ひます。祈りによつて、病を治すといふのはよい事であり、祈りによらずとも治る病氣は、その治る方法をもつて治した方が得策ではないかと思ひます。治療血清をもつて治る病氣は、須らく治療血清を用ふべきであります。ヴァイタミンの缺乏によつて起る病氣ならば、すべからくヴァイタミ

ンを與ふべきであります。かういふ様な場合、御祈禱で治さうといふやうな手段を執つてゐるのは、さう考へて見てもよろしくありません。だから信仰によつてなり、或は又御祈禱によつてなり、難病を治さうとする精神は、貴いけれども、その精神は決して片寄つてはならないのであります。御祈禱によつて、病氣が治らなかつた場合、まだ、御祈禱が足らぬからだ、あくまで精進する精神は賞讃すべきであります。尤も、冷靜に考へたなら、簡単な方法で治るべき病を、さうまでも自分の心を鞭撻することによつて處置するのは考へ問題であらうと思ひます。尤も信仰は、理性の判断を超越したものであつて、理性の活動する餘地を残すやうなところでは、本當の信仰は云へないかも知れませんが、この點は信仰を持つもの、一應反省すべき處でないかと思ひます。なほ又熱烈なる信者となつた餘り、非常な

荒行を試みたり、或は又極端な非衛生な事を試みたりする事も一應反省すべき餘地があるのではないかと思ひます。

殊に現代人は理性が邪魔をして、信仰に入り難いのでありまして、信仰に入り難いにも係らずその宗教の説くところを、遵奉して治病に應用するといふことで、果して治病の効果を擧げ得るか否うかは頗る疑はしいこと、云はねばなりません。

患者自身が自分の磨かれた理性によつて一種の考をいただき、自分獨特の治病法を案ずるために既成の宗教を参考とするならば差支へありません。けれども、たゞ無暗に既成の宗教に入つて、何の反省もなく、その宗教の教へるところを遵奉し、病をそれによつて治さうとするところは考へ問題でなくてはなりません。既成の宗教に縋つて、大なる慰安を得れば別にいふ事は

ありません。けれども、さもない場合は却つてそこに一種の煩悶を生じて治病どころか病を悪くするやうなことがありはすまいかと思ひます。

然し、他人が慢性病に罹つてある宗教的信仰を得、それによつてみごみに病を治したと聞いたやうな場合、自分がさうしても信仰に入るここの出来ぬのをなげくといふやうな人は決して少くはありません。實際慢性病者は、醫藥に恵まれないことを悲しむと同時に、信仰に恵まれない事をも悲しむのが常でありますから、さういふ人を救はんが爲に所謂他力的に患者に治病術を施して治してやらうといふ人も澤山あります。これらの人は自分が信仰を得て一種の不思議な才能を持ち、それに依つて患者を宛もキリストが多く、病人を治してやつたやうに、治さうとするのであります。これもよくよく考へてみるに、決して當てにはならぬのであります。

尤もその術者が偉大な人であればあるだけ、その人格の光によつて患者に一種の暗示を與へ、治病の實を擧げるこゝが出来るかも知れませんがさういふやうな人は洵に渺いであらうと思ひます。

殊に他力的な治療を行ふ場合、たゞへば一種の植物の葉なきを應用してそれに依つて病を治さうと企てる人があり、而もそれにいろいろな理窟をつけやうとするのでありますが、その植物の葉を機縁として患者の治病的精神を活動せしむるならば差支へありませんが、さうかするに、その植物の葉そのものが、特殊の治病力を持つてゐるやうに説いたり、或はその作用にいろいろな醫學的な説明を加へるこゝは、却つてその療法の價值を減ずるものでないかと思ひます。その植物の葉が、一種の神秘力を持つてゐるに考へたならば、それ以上にいろいろの説明を加へる必要は毫もない

のであります。こゝろが普通の人間は、そんな植物の葉がそのやうな神秘の力を持つてゐるさうもないと思ふので、その植物の葉が濡れてゐる時は悪いさかさういふ時刻に用ひねば悪いさか云ふ勿體ぶつた條件を附けるのであります。却つてさういふ事こそ、むしろ疑ひ深い現代の慢性病者を失望せしむるこゝになるのであります。

尙又時にはいろいろな肉體的の「行」や或は精神的の「行」を行はせる場合があります。殊に飢餓即ち斷食療法は屢々慢性病の治療に應用されるこゝろであります。斷食といふこゝろは、精神の集注には頗る効果があるこゝろで、昔から多くの僧侶や修驗者によつて屢々行はれたこゝろであります。さうして確に斷食によつて年來の難病を治療した例が尠くないのであります。併しながら慢性病者たるものは、斷食そのものが病に効があるこ

考へては成らぬのであります。断食すること即ち食物を攝らぬといふ事が、病氣によいのではなくつて、断食をする精神そのものが病を追ひ拂ふのに役に立つのでありますから、断食をする位な勇猛な精神を持つ人ならば、その實断食をしないでも難病を驅逐する力を持つてゐる人であります。ところが断食療法の効果を説く人は断食をするにヤレよの器官の機能が高まるの、ヤレ何々の作用が激しくなるの、そこに生理的の理窟をつけやうとするのであります。これが爲に患者が却つて一種の迷妄に陥り、恐るゝ断食をして、反對に害を得るやうな事が尠くないのであります。

肉體の治療を主とする現代の醫術に失望して精神療法に走る場合、その精神療法だけでは冷靜な判断を下さぬといふことが抑も間違つて居るものであります。精神作用は理論を超越してゐるから、精神療法で行はれるこ

こは、無條件にて従ふべきであること考へては間違つてゐると思ひます。それ故慢性病者は現代の所謂物質的治療法に冷靜な常識的判断を下すと同時に、精神療法なるものにも、冷靜な常識的判断を下さねばなりません。殊に、精神療法といふ文字の代りに神秘的な意味の言葉が用ひられ、かゝる文字がつくこと、何か理論を超越した一種の神秘なものであるかのやうに考へ易く、之等の療法なること理窟を許さぬやうに思ひ易いのであります。しかし、それは根本的な誤りでありまして、斯る療法に對しても、われ等は冷靜な判断を下し、何が故に慢性病には精神療法が必要であるかと言ふことを考へ、之等の術者の行ふ「術」を冷靜に批判する必要があるものであります。

尤も精神療法を行ふ者の側から云へば、絶対に自分の行ふことを信じてくれなければ、精神療法の効果はないこと云ふかも知れませんが、これまで述

べて來ましたやうに、精神療法なるものは當然慢性病者の最後の絶りごころになるものでありますから、何が故にいろくくの術を行ふか云ふその原理をはつきり理解させたならば、精神療法なるものは、現今よりもつこく隆盛になるに違ひありません。

従來の精神療法に於て行はれたごころの、最も普通なごころは、所謂臍下丹田に力を入れるごころであります。これは申す迄もなく、禪に於ける坐禪に似たものでありまして、確に丹田に力を入れ、呼吸を下腹で行ふごころは、すべての人が経験して、健康を増進し慢性病を治すごころは、はれてゐるごころであります。それが爲に従來世に行はれて居る所謂健康法なるものの中には、多くはこの事が取り入れられて居るやうでありますし、又慢性病の治療の際にも應用されて居るのであります。精神療法なるもの、多くも、

この原理を取り入れて居ります。

しかし慢性病者がこの方法を行ふに當つては、何がためにそう云ふごころを行ふごころ慢性病が治るのであるかを考へてみなければなりません。腹式呼吸がいゝごころか、丹田に力を入れるごころがいゝごころか聞いて、ただ無暗にそれを行ふだけでは考へ問題だごころはねばなりません。すべて物事を何の理解も持たずに行ふごころいふごころは、多くは長續きしないのであります。反對に又例へば腹部の病氣なきが起つた場合に、無理に腹式の呼吸を行ふごころいふごころはむしろ害があるごころ云はねばなりません。實際その理由さへ明かにしたならば、強ち腹式呼吸なり丹田の呼吸なり、或は又何々式靜座法を行はなくつても、それを行つたごころ同じ効果に到達するごころが出来るのであります。

健康者が腹式呼吸を行へば、その健康を増進致します。普通の理窟で考へれば、運動を行へば全身の血行を盛んにするから、従つて健康を増進するさいふこころは誰にも考へ得られるこころであります。然しながら慢性病者が、それを行ふ場合に、健康を増進する方法であるから病氣が治るのだから、こころを當を得てゐないと思ひます。

然らば下腹に力を入れるこころ、即ち臍下丹田に力を入れ、そこで呼吸するこころが何んの爲に病を治すよすがとなるか、考へてみますに、これには昔からいろいろな人によつて、いろいろな理由がつけられてありますけれども、私の考へるこころでは、臍下丹田の呼吸を行ふこころによつて、迷妄に陥つた患者の精神を轉換する機縁ならしめるものではないかと思ひます。慢性病者に見られる最も大きな弊害は、たゞその精神が、その病の存在し、

てゐる場所、換言すれば一番症状の強く現れて居るこころへ、注がれて居ります。たゞへば胃の悪い人は、たゞ胃に精神が集まり、心臓の悪い人は、たゞ心臓に心が向ひ、肺の悪い人は、たゞ肺の方に氣を取られて居ります。病氣を持つ器官に精神が集まるこころは、疾病の恐怖を高めるに過ぎません。疾病の恐怖を高めるこころは、益々疾病を悪化せしむるものでありますから、慢性病者の治療の際には、まづその精神の「ありか」を病氣に罹つてゐる部分から離れさせる必要があるのであります。尙又前に繰り返して申しましたやうに、慢性病者は、たゞその主観によつて病をつくりつつありますから、さうしても心機を一轉して病を作らないやうにしなければ成りません。そこで臍下丹田に力を入れるこころは、即ち病的器官に集注された精神をそこへ導くと同時に、患者の心機の一轉を圖つて、病を

作りつゝある主観を變更するに役立つのではないか。私は思ふのであります。だから丹田の呼吸を行ふ人は、その精神でその實行に取り掛る必要があると思ひます。勿論まだこの他に心を調和するとか、何んとか、いろいろな理由があります。尙又私の今云つたやうな解釋は全々見當はずれの事であるかも知れません。けれど座禪といふやうな事に對して、今の科學は何の權威ある説明をも下し能はぬのでありまして、科學的に説明の出來ない以上、その説明は各自の考へ方に任せて置けばよいのであります。だから私の見るところでは、丹田の呼吸といふものは精神轉換に主役をつとめるのでありますから、他の方法で精神轉換を圖り得るならば、何も座禪の方法に依る必要はないと思ふのであります。従つてそれが行へなくつても、悲觀する必要もなければ、反對にそれを無理に行へば害があるといふ

事もよく理解し得られると思ひます。

總ての精神療法の際に行はるゝ各種の術式なるものも、矢張りこれと同様な原理を持つものゝ解釋して差支ないと思ひます。ヤレ術者がさうするかするところから一種の靈氣が傳はるるか、或は自然治癒の能力をよび起すとかいろいろな説明をつける人がありますけれども、要するに私は精神療法に行はるゝ色々の術式なるものは患者の誤つた精神、囚れた精神、迷妄に陥つた精神を常道に立ちかへらしめる手段を見做したいと思ふのであります。

かういふ精神療法を行ふ人は或は憤慨するかも知れませんが、坐禪といふものはそんな簡單なものではない、それによつて精神を統一し、一種の不思議な力を發現せしめて難病を驅逐するのだ、と云ふやうに説く人があ

るかも知れませぬが、畢竟それは謂はゞ形而上の問題に同じものでありまして、到底私達の考へるだけのものではないかも知れず誰がなんぞ説明しやうとも、その説明はやはり誤つてゐるかも知れませんが、だが畢竟するところは、たゞひ深い理由があるにしろ患者の心機を轉換すれば慢性病は治癒に向ふのでありますから、強ち具體的の精神療法を行はずとも、慢性病を驅逐するにこそは困難でないと思ひます。

それ故精神療法を受ける人は、これによりて自分の心機の轉換を圖るようにするつもりで居らなければなりません、精神療法を受けて直に病苦から救はれやうと期待してゐる時は、その期待は多くは裏切られてしまひます。具體的の精神療法によつて救はれることは思はず、救はれるべき機會を作つて貰ふといふ意味で、精神療法を受けないに失望が残るだけでありま

す。精神療法を施す術者が、精神療法を施しても少も治つて行かぬ患者に向つて、ヤレ信仰が足らぬの、ヤレ心の持ち方が悪いの云ふことは、その實間違つてゐるのであります、一面に於てさう云はなければ、自分の權威に係るから、さういふのであります、それは何も精神療法者の罪ではないのであります。心機の轉換を待つ手段を解釋したならば、何もそのやうな事を云つて辯解する必要はありません。又患者の方でも、ある種の精神療法を受けて治らぬ時、その療法に絶望を抱く必要はありません。精神療法を行ふ人の中には、いろ／＼なヒチむづかしい規則を立て、それを實行させやうとする人もありますが、いろ／＼の規則を立てるさいふのも、患者の心機を一轉させる機縁を見付けさせる手段でありますから、いかに規則通りに實行しても病の治らぬ人もありますし、又強ち規則通りに行はなくても、

立派に病を退治し得る人もあります。

あらゆる物質的醫療に絶望した上、あらゆる精神療法に絶望する患者も少くはありませんが、それは要するに未だ治療の時期に立到らぬと云ふべきでありまして、自分の病がそれ程治し難いものと思ふべきではないのであります。うまく心機の轉換さへ出来れば、薬もいらなければ、御祈禱もありません。病氣はみごこに去つて行くのであります。

然し心機の轉換をたゞ慢然と待つてゐるだけでは埒があかぬから、患者がそのつもりになつて、精神療法を受けるならば、きつと精神療法の効果は見事に現れて来るだらうと思ひます。即ち精神療法そのものによつて治ると思はないで、精神療法を媒介として心機の轉換を圖るのだと考へたならば、早くその時機に遭遇するこゝが出来らるであらうと思ひます。だから

精神療法者が、いろ／＼な學理的説明をつけて、精神療法の特効あるこゝを患者に思ひ込ませようとするのは間違つてゐると思ひます。そう云ふ説明をつけるために、却つて精神療法の價値は減じ、折角の精神療法の權威をも失ふ事になるのであります。

尤も最近には自然治療力の問題と精神療法との關係を具體的に説くものがありました。自然治療力は潜在意識のつかさざるこゝろであるから、その潜在意識に暗示を與ふれば病は治るのである、精神療法は潜在意識に向つて治療の暗示を與へるのだ、なごこいふ極めて穩かな説も見られるのであります。これ等はなるほご尤もな説明であります。潜在意識なごこいふものは、一寸掴みどころのないものであります。それに依つて萬事を説明して行かうとしては、必ずしも患者の満足を買ふこゝが出来ません。こゝに

かく精神療法なるものは云はゞ説明を超越したものでありまして、この成り立ちには病氣を精神の力に因つて治さうとするのでありますが、それを電氣の學説と結びつけたり、或はホルモンの學説と結びつけたりするのはよくないと思ひます。要するに精神療法の學理的説明なるものは、精神療法にまつてはよけいなものであります。若し精神療法の原理が科學的に説明出来るものであるならば、ヤレ氣合術だとか、ヤレ靜坐法だとか、ヤレ祈禱療法だとか、ヤレ自強術だとか、その他種々雑多な方法がある譯のものではない筈です。従つてこの療法が、この病氣によいなぎ、云ふ譯はないのであります。甲の精神療法から乙の精神療法に、乙の精神療法から丙の精神療法に轉々して移りあるくこゝは何んの意味もなさないのであります。さうしてゐる間にある機會から心機が一轉し、自己の迷妄が取れた場合は

じめて病が治るのであります。

それ故精神療法を受ける患者は精神療法によつて治らうとは思はず、自己の病を治すために精神療法を試みるのだと云ふ覺悟を持たなければならぬのであります。

第七章 合理的慢性病治療法

さてこれからいよいよ慢性病の合理的治療法といふべきものに就いて述べようとするのでありますが、自分では合理的だと思つても、見る人によつては少しも合理的でないかも知れません。併しながら合理的慢性病治療法なるものは、誰もハッキリした事を知らないものでありまして、知つてゐるならば何もこんなに多くの慢性病者が苦しむ譯はないのであります。

云つて慢性病は絶對的に治らぬか云ふは、決してさうでなく、見事に治つた人もすくなくありませんから、何か適當な方法を講じたならば慢性病を治すこゝが出来るとあらうは誰しも考へるこゝろであります。

さて然らばさうして慢性病を退治すべきであるか云ひ申しますに、私一個の考へでは度々繰り返へして申しましたやうに、慢性病者は自分の心で病氣を作つてゐるのでありますからその心を立て直しさへすればそれで慢性病の治療を圖るこゝが出来ると思ひます。前にも申しました通り、人間の身體には自然治癒力が存在してゐるのでありますして、慢性病者に於ては、その自然治癒力が患者の恐怖心か、患者の妄想かによつて、さまたげられて居るのでありますから、その恐怖を除き、その妄想をなくしてしまへば自然治癒力は當然活潑に働いて慢性病を治癒せしめるに役立つと思ひま

す。然らば次に起つて來る問題は、如何にして患者の恐怖を除き、いかにして患者の妄想をなくするか云ふこゝであります。多くの患者は恐怖をする事が悪いと知りながら尙且恐怖せずには居れぬのでありますして、理窟を説いてその恐怖を除かうとしましても、到底除ける譯のものではありません。理窟は一通り患者も心得て居るのでありますして恐怖が悪いと知り乍ら、恐怖せずに居られないために、後には恐怖するこゝを恐怖する状態に陥つてゐる人に向つて、恐怖が病に悪いからそれを除け云つたこと、患者を恐怖せしめこゝすれ、患者の恐怖を取り除くこゝは出来ません。けれ共結局は患者がその恐怖から脱しなければ、病は治らぬのでありますから、矢張り何んかして、その恐怖を取りのぞく事を工夫しなければなりません。

それ故従來この疾病恐怖を除く爲にいろいろな方法が行はれました。或は催眠術によつたり、或は又その他のいろいろな具體的な方法が講ぜられたりして居りますが、これも矢張り卓効はないのであります。そこで然らばどうするかといふ問題が當然起つて來ます。然しその答へは、残念乍らどうにもしやうがない、いふより他はありません。つまり恐怖する人は、飽く迄恐怖するがよろしい、症状を氣にする人は飽く迄症状を氣にするがよろしい。どうにも仕様がな以上、捨て、置くより他に仕方がないのであります。然しあるがまゝにあらしめるといふことは、實は慢性病治療の第一歩に踏入つたもの云つてよいのであります。恐怖なり苦痛なりを脱れようとし乍ら、而も脱れる方法はないから、ますます恐怖は増し苦痛は増して行くのであります。だからその恐怖を脱れようといふため

間は永久に脱れることが出来ません。「恐怖するなら恐怖せよ」それでよいのであります。一たい慢性病者がいろいろな症状を恐怖する有様を見ますに、大抵その症状はそれ程その患者に危害を與へてゐないのであります。たゞへば不眠を訴へる患者は、數年の間不眠を訴へながら、しかもからだにそれ程の衰弱を受けて居りません。患者は眠れないのでなく、その實眠つてゐるのであります。眠れないといふ恐怖は、眠らうとする努力のために精神が活動をして、普通の眠りを幾分か妨げるのであります。その實その患者は必要なだけの睡眠をこつて居ります。だから不眠の場合にいろいろな方法を講じて、もがきあせるといふことは、愚なことであります。眠れなければ眠れないでよいのであります。ところが眠れない、あすの仕事に影響する、か、もう三時間より眠る時間がない、か、あせるために益々

眼は冴わて来るのであります。だから眠れなければ、眠らないで置くのであります。捨て、置きさへすれば、充分身體が調節して行つてくれるのでありますから、不眠の爲にそれ程害を受けることはありません。

然し、かう云つただけでは、恐らく不眠の恐怖から脱れることが出来ぬであらうと思ひます。だからさういふ人には、大いにもがくが、大いにあるが、いゝ忠告したいと思ひます。あせり乍ら、もがきながら暮して行つて三十年、五十年、無事に過すことが出来ればそれで結構ではありませんか。それ故何さかして恐怖から脱れやうとあせる人は、不眠に限らず、その他如何なる症状でも、それを迎へる心になるが、いゝと思ひます。夢精の如きものは、屢々結核患者の恐怖の種になります。夢精を治す藥劑なきといふものはある譯のものでありませんから、藥によつて治さうとするこ

は愚の骨頂であります。だから夢精を度々起して、それに恐怖を抱いてゐる人は、大いに夢精を歓迎する心になつたら、いゝと思ひます。夢精といふ事は氣味の悪いことですが、それに依つて病がそれ程悪化するものでありません。だからそれから脱れようと思はせることは當を得て居りません。

けれ共中には、他人に云ふことの出来ない恐怖に悩んで居る人があります。例へば法律上の罪を犯したとか成は道德上の罪を犯したとかいふ場合にはそれを明るみへ持出すことの出来ない以上、異常な苦痛をこの人に與へるのが常であります。けれ共、それか云つて他人に告白することの出来ない場合には、自分で苦しむより他致方ありません。だから罪惡を恐怖する人も恐怖に任せて置くより仕様がありません。もし幸ひによい告

白の時期が来たならば、これを告白して苦惱をまぬがるべきであります。

總ての恐怖は、このやうに、故意にそれを除かうと思つても、除き得ないのでありますから、結局は捨て、置くか、或は寧ろ徹底的に恐怖してみる氣になるより他に道はないのであります。最も恐怖の中には、ものゝ理窟を知らないから起るものもありますから、さういふのはよく理窟を説き聞かせてやれば、その恐怖を取り除く事が出来ます。尙又道德的の罪惡を犯して、恐怖に陥つてゐる人は、それを告白させて適當な方法を講じてやりさへすれば、恐怖を除くこゝが出来ます。ヒステリー患者の如きは、その過去に於て深く心に與へられた印象が、各種の症状の原因となるこゝがありますから、さういふ場合には、よろしく過去に受けた印象を明るみへ出してそれを解剖して、巧みに説明をしてやればヒステリーの症状は去つて行く譯であります。

ります。

さて慢性病の際の最も難問題である疾病恐怖が、さうにも仕様がなないと同じく、その他の症状もやはり多くはさうにも仕様がなないのであります。尤もその症状をある方法によつて一時的に、輕快させるこゝは出来ますけれども、病氣の根元が患者の主觀にあるのですから、その主觀を變更しなければ、病氣は治らないのであります。そこで次に起る問題は病人の心を如何にして變へるか、病人が陥つた迷妄から如何にして救ひ出すかといふ問題が起つて來るのであります。人間の主觀といふものは、その人の體質、氣質によつて左右されるものでありますから、根本に溯つて云ふならば、その體質、氣質を變へるこゝに努力しなければ、その主觀を變へるこゝは出来ないのであります。従つて慢性病の治療は、その人の體質を改造するこゝに

よつて、はじめその目的を達するこゝが出来るのであります。然らばその體質を如何にして改良するか云ふ問題が次に起つて來ます。こゝに於て問題は二つに別れるこゝいふ事が出來ます。その一つは信頼すべき醫師の手によつて、自分の體質を改良して貰ふこゝ、今一つは自分自身が苦心してその體質を變へるこゝであります。

こゝで今の醫師の中に、病氣を體質問題まで溯つて取扱はうとする人は甚だ少いのであります。病氣がその人の體質の如何に深い關係を持つて居るこゝは彼の醫者も知つて居りますけれども、體質こゝいふものは、これを如何にもするこゝの出來ぬ不可抗力のやうに考へてゐるが爲めに、體質改良を企て、みようこゝもしないのであります。實際體質が遺傳に依つてある程度迄左右されるこゝは、争ふ可からざる事でありまして、遺傳こゝいふのは、生物が共通に支配さるゝ一種の不可抗力であります。私達が如何にもがいても、親に似てゐる私達の顔を變へるこゝが出来ぬこゝ同じく、親に生みつけられた性質を變更するこゝいふこゝは、人間が親によつてこしらへられるこゝ云ふ原則を離れない以上、不可能なこゝであります。

併しながら遺傳は必ずしも體質の全部を支配するものではありません。

體質、氣質こゝいふものは、後天的の原因によつても左右されるのであります。前にも私は内分泌腺が、人格を左右するこゝいふこゝを述べましたが、何かの原因で内分泌腺が異常を起した場合には、その人の性格は變つて行くものであります。尤もさういふ異常を起すやうな運命にその人の體質が置かれてあるのだこゝ云つてしまへばそれ迄の事でありませんが、ある程度迄内分泌液の應用によつて性格を立て直すこゝの出來るこゝを見るこゝ、必ずし

も運命だとして諦める必要もないやうに思はれます。

さうして、内分泌腺の適當な處置によつて、ある程度迄人格を變へるこゝが出来るとすれば、其他の方法にても性格なり氣質なりを變へるこゝが出来るとして、實際に醫者達は、この點に目をつけて體質の改造を行ひ、以つて慢性病の治療を圖らうとして居ります。

こゝろが所謂物質醫學にのみ心を傾けてゐる醫者は、毫もこの點に注意を致しません。慢性病といへば、すぐ様その症狀によつてそれに對する藥劑を與へ、もつてその病氣の治療を計らうと致します。だから慢性病患者が醫者さんにかゝつて治してもらはうとするならば、その醫者さんは少くも慢性病患者の體質について考慮を費し、その體質の改良を期する方法を講じてくれる人でなくてはなりません。

然るにそのやうな醫者さんは甚だ少いのであります。少くも津々浦々に渡つて、さう云ふ醫者さんが居ることは限りません。だから慢性病患者はさうしても、自分自身がその體質を改良するに心がけるよりほか仕様がなないのであります。

こゝ云つて慢性病患者は、否、慢性病患者に限らず何人でも、自分の體質がいかなるものであるかを知るこゝは容易でないであります。況んや、その體質を如何にして變更するかといふこゝは、ナカ／＼自分では工夫しにくいのであります。

してみるに慢性病患者は自分でその體質を變更し、従つてその主觀を變更するこゝは難中の至難事となつて來るのであります。そこで結局はやはり、さうにも仕様がなないといふこゝになり、唯なるがまゝに任せるより他の

方法は無くなつて参ります。

同じ原因が働いても、甲の人は神経衰弱を起し、乙の人は神経衰弱を起さないといふところを見るに、云ふ迄もなくその體質の然らしむるにこそ云はなければなりません。併し甲の人は仕方がないに諦められぬのであります。そこで何んにかして神経衰弱を追ひ出さうとあせり、出来るならばその體質をも改良したいと希ふのであります。幸ひに良醫にかゝればよいけれども、通り一べんの治療しか施さない醫者であるに、或は左程深い考へを持つてゐない精神治療者に掛れば、結局やはり病は治つて行かないのであります。だからさうしても、自分自身は何んにか工夫をこらすよりほか道はありません。と云つたところで、専門家にさへ出来ない事が素人に出来る譯はなく、患者はみすみす悲境に陥ります。慢性胃腸病に

罹つた場合、如何に消化剤をのんだり、胃を洗つたりしても治らず、又いろいろな食餌療法、或は断食療法を行つても治らない場合、それ以上に素人は何も手の出しやうがないのであります。如何に人をかへ、方法を變へてやつてみたところが結局は五十歩百歩の違ひであつて、治らぬ時は相も變らず治らないのであります。糖尿病にかゝつて糖の出るのがやまらぬ時、自分ではさうも仕様がなないのであります。喘息に悩んで一時は醫者の注射で発作の苦しみを除き得るにしても、喘息そのものは相も變らず治つて行きます。さうした場合、患者自身の力ではさうにも仕様がなないのであります。

だから一旦さうにも仕様がなると知つたならば、患者自身にして行ひ得る唯一の道は、さうにも仕様がなるといふことに徹底するより他ありません。

ん。即ちさうにも仕様がなないふこゝを痛切に感ずる必要があります。そうしてそのさうにも仕様がなない痛切に感じたこゝろに慰安を求めるより他に致方がありません。然し幸にさうにも仕様がなないいふ絶望に徹底したならば、それこそ大きな慰安なのであります。私達は誰でも死にいふものが、さうにも仕様のない運命であるといふこゝを知つて居ります。如何にその死を脱れやうともがいても、結局は脱れられぬこゝを知つて居りますから、眞に脱れるこゝが出来ぬこゝ知つた時にはじめて死に對して安らかな心を感じます。宗教的信仰といふものに就いて私は深い研究を試みたこゝがありません。宗教的信仰といふものに就いて私は深い研究を試み感ずるこゝろに信仰の芽生ひがあるのでないかと思ひます。そこに始めて救ひの手が現れるのだらうと思ひます。だから慢性病者は一刻も早く

人間の力ではさうにも仕様がなない覺悟する必要があります。精神分析學によつて精神を分析し、ヒステリーを治すこゝが出来れば、いはゞ「さうにも仕様がなない」けれ共、精神分析の大家が常にわれ／＼の手近に居るゝは限らず、又精神分析をしたこゝろが、必ず總てのヒステリーを治すこゝは困難だらうと思ひます。だから現に醫者に罹りつゝある人も、或は又現に精神療法を受けつゝある人も、一度考へを翻してさうにもならぬといふこゝを痛感し、然る後醫療を受けるなり、或は精神療法を受けるやうにした方が良いいと思ひます。

一體人間は自分で生れようといふ意志が働いて生れたのではなく、知らず識らずの裡に両親に生みつけられたに過ぎません。そうして段々成長して死に至る道程は、どんなに人間が頭を絞つたまで、その原則を變へる

譯には行きません。してみるに、有るが儘に任せて置いた方が、結局は得策であらうと思ひます。蟻螂が龍車に向つて、斧を揮ふに、ひきしく、人間が自然に向つて、弓を引くに云ふ事は笑ふべき愚なことであります。私達が、ものを考へるに、いふことからして既に生みつけられた身體のある器官に依つて行はれる譯でありまして、その考へに依つて人間の通つて行く本道を左右するに云ふことは不可能であります。だから私達は病氣の際にもたゞ有るが儘に病氣を展開させて行けばよろしい。急性病の治療に應用する事柄をその儘そつくり慢性病に及ぼさうとするからいけないのでありまして、慢性病の際には、いろ／＼な小細工を施さないやうに心がけ、病をして病自らを治癒せしむるにいつた様な態度に出るのが、一番賢い方法だと思ひます。

斯く申すにいかにもそれは消極的な考へ方であるかのやうに見えますけれど、その實決してさうではありません。病をして有るが儘にあらしめるに、いふ事は、實は非常な苦痛を伴つて來ます。その苦痛に耐ゐるに、いふのは大變な事でありまして、云ひかへれば、病をして有るが儘にあらしめるに、いふ事は、非常な決心と努力を要するのであります。全く慢性病者がその苦痛を黙過して行くに、いふことが出來たならば、慢性病の治療は甚だ容易なものになつて來ます。

一方から云へば、有るが儘に任せるに、いふことは、心機の轉換を待つにも極めて好都合であります。前にも申しましたやうに、心機の轉換に、いふことは、もがいても必ずしも得らるゝものではありませんから、一方に苦痛を忍びつゝ、暮して行く時、ある時機にうまく到來するに、ちがひありません。

何か異常な事件でもあつて、生活に非常な革命が起つたような時、心機は翻然として轉換さるゝ場合がありまますから、さういふやうな目に遭つたつもりで、自己の迷妄を破つたならば、自發的に心機を轉換するこゝが出来るかも知れませんが。或は奮然として病にこだはる心を捨て、病を持つたまま、仕事をやるやうになつたならば、その内に主観は變更されるかも知れません。これを要するに慢性病患者たるものは、若し眞に自己の體質を見抜き、自己の主観を變へて呉れる人があつたならば、須からくその人に身を任せ、さもない場合は、成るが儘に任せるより他はないと心得べきであります。

一般に慢性病患者は自分といふものを餘りに無視して居ります。いつの間にか自己を失つて居ります。そうして醫藥に頼り、精神療法に頼らうとするのでありますが、無論精神療法もよろしければ醫藥もよろしいたゞ

然しその際失はれた自己を取りかへすといふこゝを第一條件としなければなりません。外物に頼るといふこゝをそれ自身が既に自己を没却するこゝであります。結局苦しむものも自分なれば、死ぬのも自分だけでありまますから、自己に目覺めて、自己を見つめ、自己の間違つた考へを正し、そうして自分自身に病に處する道を考へ、一方自己の生活を充實せしむべく心掛けねば成らないのであります。

其處で私は自分が長らく肺結核に悩まされた關係上、如何にして自分がこの病に處して行くかといふこゝに就いて考へた結果、さきに「闘病術」の一書を公けにしましたが、これは單に肺病に限らず、總ての慢性病の際にも患者の身を處する方法であるといふことも構ひませんから、次章に私は、私の主張する闘病の原理を述べようと思ひます。

第八章 闘病術

良醫を求めようと思つても良醫がなく、信仰を求めようと思つても信仰が得られず、それかき云つて薬劑はさつぱり効果がなく、尙又書物を讀んでも埒があかない時、慢性病者は、さうして病を驅逐するかに深く迷はねばなりません。そこで私は斯様な慢性病者は先づ病を治さうとあせるよりも如何に病に處して行くべきかき云ふことを考へた方が得策であると思ひました。人間は苦痛を避けようと思へば思ふ程、その苦痛は益々その人にきつて重みを加へて参ります。ですからその苦痛を脱れる唯一の方法は、その苦痛に耐ゆる力を養ふことであると思ひます。苦痛はこれを甘やかして置けば置くほざいよく募つてまゐりますから、積極的にそ

の苦痛に面して、苦痛をあまやかさない態度をさらねば慢性病者は一日もして安らかに生きて行くこゝが出来ません。即ちこゝに病を積極的に闘ふ必要が起つて来るのでありまして、如何に苦痛に耐へ、如何に病に處し、如何に病を闘つて行くかきいふ方法を考へたのが、即ち闘病術であります。

一般に慢性病者は長い間、病にさいなまれて非常にその心が弱くなつてゐるのであります。疾病に對する恐怖心が益々募り、僅かなこゝに心が興奮して、所謂感じ易く、悲しみやすい状態になつて居るのであります。そうしてやゝもするに、その苦痛を他人に訴へやすく、而も誰も適當な治療法を教へてくれないのでありますから、果は人を恨み、世をにくむ心さへ起つて参りまして、慢性病者の多くは、いはゞ病氣のこゝにその心の全部を捧けて居ります。換言すれば何の爲に生きて居るのか分らないやうな状態に置

かれて居ります。甚だ惜しむべき事ながら病氣の爲に折角の生命を台なしにしつゝあります。

病氣が治つたなら、あれを仕様、これを仕様と考へて、遂には病氣の治る時期がなく、その儘生命を失つて行くのであります。而も今日暮れた「時」は決してその人の生涯に於て再び巡つて來ないのであります。たゞこの後健康になつたとしても、病氣の間に失はれた歲月はこれを取り返へすことは出来ません。それを取りかへすことの出来るやうに思ふのは、たゞ一種の氣休めに過ぎないのであります。實際この氣休めのために、どれだけ多くの患者がその生命を浪費しつゝあるか知れません。悔を千歳に残すといふ言葉がありますが、慢性病者の多くは時とする、この言葉さへ、それほど強い刺戟を與へない程麻痺してしまつてゐるやうに思はれます。

ですから私は慢性病者は何よりも先づ生きる事に努力しなければならぬと思ひます。さうして生きんが爲には、生きることに興味を持たなければなりません。ところが多くの慢性病の患者はその實生きることに興味を持つてゐないやうな態度をこつてゐるのであります。私が「闘病術」を公けにしたとき、二三の患者は私に向つて、抗議を申込んで來ました。それは何であるか、と申します、慢性病患者と雖も生きなければこそ薬をのんで居るのだ、といふのであります。これは一應もつともなことであります。けれ共、私のいふ生きる、といふことは、單に生存する、と云ふことではありません。醉生夢死といふ言葉がありますが、醉生夢死でも一つの生存であります。然し人間はたゞ生存するだけでは、生き甲斐がないと思ひます。即ち生きることに對する努力を拂つて、生命の内容をより善くすることに、即ち、

よりよき生活を營むことにつまめなければ生き甲斐があることは云へません。で、私の言ふ「生きる」は「よく生活する」云ふ意味なのでありまして、よく生活するが爲には、病の存在するのも決して邪魔にはなりません。換言すれば病を持ち乍ら生きて行くことは立派に出来るのであります。

かう考へてみれば、最早病を治すことは問題で無くなつて來ます。病を持つからだを其儘生活に適應せしめて行くならば、病があらうがあるまいが問題ではありません。病の存在が問題でなくなれば最早病がなくなつたと同じことなのであります。

慢性病者に見らるゝ苦痛はその大部分が慢性病者の心に依つて廓大されて居るのであります。即ち慢性病者は自分がいろ／＼の症状を拵らへるに同時に、その症状に伴ふ苦痛を常に廓大して感じて居ります。それ故

慢性病者の苦しみなるものは、その心を緊張せしめることに依つて、いくらでも軽くならしめることが出来るのであります。従つて病を持ち乍ら生活することはいふことは割合に慢性病者にとつては樂な事でありませぬ。苦痛は誰にとつても厭なものであります。けれ共その苦痛は尋常一様の工夫で取り除き得ないと思つたならば、より多くの苦痛を迎へる氣になれば何んでもなく暮らすことが出来るのであります。たゞへば腕に傷をして痛みに悩んでゐるものが、激烈な齒痛にかゝるに腕の方の苦痛はケロリと忘れてしまひます。これは極端な例かも知れませんが、苦痛といふものは多くは主觀的に判斷さるゝものでありますから、自分の心の持ち方で、軽くも重くもなるのであります。だから慢性病患者は苦痛を避けるかはりに苦痛を迎へればよいのであります。一寸考へるに幾月も幾年も同じ苦痛を

忍んで行くといふ事は随分な努力のやうに思はれますが、その實苦痛を迎へる心になつた瞬間から苦痛はさみに輕減されて非常に樂な氣持ちになるのであります。

然るに多くの慢性病者は餘りにも苦痛を恐れます。何んをかしてその苦痛をのがれやうとあせりますが、あせつたところで苦痛を除く方法はなんにもないのでありますから、あせるだけが損だと言はねばなりません。かう言つたからして、總ての症狀をあく迄も耐へ忍ぶ必要はありません。藥劑なり其他の方法なりで除き得る苦痛があるならば須からく除いてよろしいのであります。けれ共それは常に生活の爲であるといふことを忘れてはなりません。單に苦痛の後の快感を味はんが爲に苦痛を除いたのでは、その實意義が少いのであります。ところが多くの患者は、ほんやりこ

苦痛のない時の安樂さを考へて、そうして苦痛を除かうとして居ります。

これは所謂遊惰氣分でありまして、この遊惰氣分が患者の胸に漂つてゐる間は慢性病は到底治らないのであります。慢性病者の常として、よく轉地療養なることを行ひますけれ共、神經衰弱者などは、轉地療養をしてゐる間は幾分か病が治つたやうに感じますけれ共、何か仕事をはじめますと直ぐ、又はけしい症狀を起して來ます。言ひ換へれば、いつまで轉地療養をしてゐても果しが無くなるのであります。してみるに神經衰弱者などは一生涯ぶらく、遊んで暮らさねばならぬことになります。それでは私の言ふ生きること、遙かに遠ざかつてゐる言はねば成りません。

一方に於て遊惰な生活をして居れば、直ぐ經濟的の心配が起つてまゐります。従つて病の心配の上に、更に一つの心配を重ねることになり、心は益

々いら立つて來ます。而も遊惰の習慣をつけます。後にはその遊惰な生存そのものにさへ、一種の恐怖を感じて來ます。いつ迄遊んでゐても病が治らぬこゝを痛感すれば、遊ぶこゝに恐怖を感じるのは當然のこゝであります。かうして患者は心配や恐怖を益々多くして後には耐わ切れないやうな状態に陥つて行くのであります。畢竟これは苦痛そのものを患者の心で増長させるからでありまして、一度苦痛を迎へる心になりさへすれば、このやうな状態は起つて來ないのであります。

一般に慢性病者は慾が深いといふのか、先から先へ果しなく欲望を重ねて行くのが常であります。これは何も慢性病者に限つたこゝではなく、人間そのものがすでに貪慾極まりないものであります。慢性病に罹るこゝ、この飽くこゝなき慾望が殊更に人を苦しめてゐるのであります。例へ

ば熱が出た場合、この熱さへこゝれて呉れ、ばよいと思ひ乍ら、一たん熱がこゝれるこゝ、早く原病が治つて欲しいと思ひます。一つの醫藥で症狀が取れぬこゝ、他の醫藥を試みたがります。効がない事が分つて居りながらも、尙且あらゆる治療法を試みてみようと思ひます。ですから慢性病者たるものは生きやうとする意志を樹立し、苦痛を迎へる心になつた上に、更にあらゆる慾望を節するに心掛けねば成りません。普通の言葉で云へば、分に安んずる事に覺悟しなければ成りません。病人であり乍ら健康人と同じ振舞をせようとする爲に、其處に大きな悲觀と絶望が起つて來ます。慢性病者の心を觀察してみます。早く健康時に戻りたいと思つて居りますが、その健康時に戻りたい理由をよく探つてみます。多くは健康時のやうに物が食ひたいか、健康時のやうに性的行爲が營みたいか、云ふ安價な慾望

の爲に、健康に回復したいと望んで居るのであります。慢性病の中にも神經衰弱の如きものは見事に従前の健康通りになりますけれども、器官の冒されてゐる慢性病はたゞひ症状が去つても再び健康な器官にはなり得ないのであります。恰度一本の指を失へば二度と指が生ゐて來ないと同じく、冒された器官は完全にもとに戻らないのが普通であります。それ故慢性病者は、健康時とは別の健康状態を作ることに心掛けねば成りません。即ち一種の特別な健康状態を創造する必要があるのであります。失はれた健康は再び取りかへすことが出來ぬと信じて、慢性病者獨特の健康状態を作り、もつて意義ある生活を築き上げねば成りません。

一度健康が創造された場合には、それ故節慾といふことが最も大切になつて参ります。慢性病に限らず總ての人間生活に於て、慾望を節すること

は養生の第一義でありまして、千金方にも「善く生を攝するものは、常に心を少くし、念を少くし、慾を少くし、事を少くし、語を少くし、笑を少くし、憂を少くし、樂を少くし、喜を少くし、怒を少くし、好を少くし、惡を少くす」とありましてこれを養生の十二少と申して居りますが、これが私の所謂廣い意味の節慾なのであります。貝原益軒はこの上に「食を少くし、飲みものを少くし、色慾を少くし、眠りを少くする」ことを推奨して居りますが、慢性病者には尙更この教へが必要なのであります。中にも食慾と性慾とは、これをよろしきに調節しなければなりません。慢性胃腸病者は、食慾の問題が重大な意義を持つて居ります。肺結核患者は性慾の問題が重大な意義を持つて居ります。だから、時としては、禁慾を説かうとする人もありますけれども、禁慾といふことは、實は節慾よりも容易なことであります。慾を節するには非常に

強い意志と、充分な理解を必要とするのでありまして、これが闘病の際には最も必要な条件となつてまゐります。昔の人がすべての事を控へ目に行へし云つたことは、非常に意義のあることであると同時に、又非常に行ひにくいところでもあります。

物ごを控へ目にせよと言ふことは、時として慢性病者の安静を強ひるこゝになるかも知れません。急性病の際には、總て身體の安静を最も肝要な条件と致しますから慢性病に於ても、安静が欠くべからざるやうに考へられて、屢ば慢性病者によつて「安静」が金科玉條として遵奉されて居ります。一寸考へるに、安静は無理を行はないといふ點から見ても、節慾の本義に叶つてゐるかのやうに思はれますけれども、その實決してさうではないのであります。慢性病者は實はこの安静の慾望をも節しなければなりません。安

静といふことは、慢性病の種類によつてはある場合に必要であるかも知れません。然し乍ら、多くの慢性病者は、餘りに慾張りすぎて安静の度を過すのが常であります。よく結核患者などには意識して無理に安静を行へし云ふやうな忠告を與へる人がありますけれども、前にも申しましたやうに人間の器官といふものはこれを活動せしめなければ段々萎縮して行くのが常でありますから、過度の安静といふことは考へ問題だらうと思ひます。そこでこの程度が適度の安静で、この程度が過度の安静かといふ問題が起つてまゐりますが、これは慢性病者が病を闘ふ決心した、その決心の程度によつて定めらるべき問題だと思ひます。慢性病の治療といふことは理論の問題ではなく、而も病を闘ふのは自分自身でありますから、さうしても自分自身がその程度を判断して、適度と思ふところを行つて行かねばなりま

せん。若し慢性病患者が普通の醫者に相談するならば、その醫者は必ず安靜をすゝめるであります。けれ共如何に安靜をつゞけても病が治つて行かぬ以上は、なほそれは、安靜が足らぬからだに解釋するは餘りにも慘めなことであらうと思ひます。

繰り返へし申しました通り、慢性病者は失つた自己を第一に取りかへさねばなりません。今度はその取りかへした自己によつて總ての事を判斷して、もつて巧みに病に處して行かねばならぬのであります。

さて、病に闘ふ心の定つた以上慢性病者は最早過去のことを、こやかに言つてはなりません。病氣に罹ります。過去の生活の非を悟つてみだりにそれを後悔する心を起してまゐります。殊に病氣のために多感的になつた心はその後悔の念を一層強くして悲しみの種を致します。けれども過

去の非にかゝらずらつてゐるさいふ事は、慢性病者にまつては實は大毒なものであります。實際の戦争に於ても、過去の非によつて今後の策戦を改めることは必要であるけれども、過去の非を後悔することは、害あつて益のないことであると同じく、闘病に於ても過去の生活の非を繰り返へさぬことは必要であるけれども、無暗に過去の非を嘆く事は禁物であります。即ち慢性病者は今日に如何に生きるかを考へるのみで足るのであります。なほ又過去の非に拘泥しないと同じく將來の計劃についても、あまりに先から先へ考へるのは必要のないことでもあります。もこより生きんが爲に遠大な計劃を立てることは敢て差支ありませんけれども、問題はたゞ如何に現在の苦惱を切り抜けるかさいふことにあるのですから、あまり先から先へ考へるさいふのはよくない事であります。神經衰弱者の如きは、逆情な生

活に慣れて、將來のこみをさやかに思ひ煩ひ、しかも實際に當つては一つも計劃したこみを成就し得ないのでありまして、すべては所謂妄想に終るのが常でありますから、病を持ちつゝ仕事をすることに當つても、何か一つの目標を定めてそれに全勢力をそゞぎ、歩一歩完成に近づく必要があると思ひます。讀書をするに當つても、慢性病者たるものは、たゞ慢然書を讀まないで、何かその中から自己の興味を中心とするものを選び出し、所謂研究的態度をもつて書を讀むことにしたならば、聽てはそれによつて非常な興味を呼び起し、病を忘れて所謂一舉兩得の結果を得るこみになります。

慢性病者が意義ある生活を行はうと思つたこみで、慢性病に適する仕事はなし、又世間は慢性病者を相手にしてくれないから、さうにも仕様がなないではないかと言ふ愚痴をこぼす人がよくありますが、これも畢竟は環境さか

世間さかを頼みにして居るからでありまして、本當に自覺し、決心したならば、慢性病者が病を持ち乍ら生きて行く道は、いくらでもあると思ひます。もさよりその道を探すこみは容易ではありません。けれ共その探索の苦痛と闘ふのも一種の闘病術なのでありますから、病氣の苦痛を切り抜けると同時に、それに附隨するあらゆる苦難を切り抜けるこみに依つて、慢性病者は始めて生きて行く道を見つげるこみが出来るわけであります。

病がはか／＼しくなほらない場合には、時を以て生存を否定しようとする心さへ起つて來ます。自殺が慢性病者の辿り行く最後の運命である場合は決して少くありませんが、それは畢竟病に負けた證據でありまして、積極的に病と闘ふ心を起したならば、病を持ちながらも生を樂むこみさへ出來るのであります。「病親しむべし」といふ言葉がありますが、病そのものは

親しむべきものでないにしても、病を持つてゐながらの生活にはたしかに親しみを感じ得ると思ひます。

斯様に申したきて、慢性病者は必ずしも病を持ち乍ら生活するここを最後の目的とするものではありません。病を持ち乍ら生活するこいふことは要するに、病のない生活の階梯にするに過ぎないのであります。従來の慢性病者は直ぐさま病のない生活に飛び移らうと致して居りまして飛び移る方法がないにも係らず、飛び移らうとするところに慢性病者の悩みがありますから、私は只その悩みを減ずるために先づ病を闘ふ心を養ふべきだと思ふのであります。實際又病を闘ひながら生活して行く間に、私達に備つてゐる自然治癒力は見事に働いて病を驅逐してくれます。けれども、一たび病を闘ふここに決心を定めたならば、病が治つて行かうと治るまいと

生活そのものに差支へないのでありますから、最早それは問題ではなくなるのであります。

第九章 結言

以上私は慢性病治療に就いて私の考へてゐる要點を述べたのであります。が、もよより多種多様の慢性病の事でありますから、私の説いたここが當て嵌まらない場合も少くはないであらうと思ひます。尙又私の慢性病に對する考へは識者の眼から見たら、非常に誤つてゐるかも知れません。しかし乍ら一定の慢性病治療法なるものが嚴然として存在しない以上、私達はあつても考へ、かうも考へて、何かその間に慢性病に通有なる法則を發見し、さうして慢性病治療の原則を見出さねばならんと思ふのであります。そ

うしてそれに就いて私の考へたこゝを述べたものが、即ちこの書物の内容でありまして、私が今後自分の考へを深めて行つならば、或は今の考への非を見出すかも知れません。尙又醫學は刻一刻進歩しつゝあるものでありますから、難治を稱せられてゐる病氣もその中に難治でなくなるかも知れません。けれ共將來のこゝを思つて今日の説を差し控へるこゝいふ事は意義がないと思ひますから、私は敢て、私の考へるこゝを正直に公にしたのであります。

けれ共私の説を読まれる皆さんは、繰返し述べて來た通り私の説を盲信して下さつては困ります。序言の中に述べましたやうに、私は慢性病者の一員として、或は一個の人間として慢性病に就いて考へをめぐらしたのでありますから、たゞ私の説を鵜呑みにしないで、それを參考としてめいゝ

自分の考へを働かせ、自分獨特の治療法を講じて戴きたいと思ひます。慢性病治療は理論の問題でなく、實行の問題でありまして、害を得るも益を得るも患者自身なのでありますから、自分が一たん他人の考へを自分のものにした上でなければ、實行に取り掛らぬと言ふ覺悟を持つて戴きたいと思ひます。

多種多様の慢性病を同一の法則の下に締めくゝるこゝ云ふこゝは一面から云へば随分大膽なこゝ、云はなければなりません。けれ共悩むものが一個の人間である以上、ごこかに慢性病には共通した法則が存在してゐるだらうと思ひます。そうしてその法則なるものは、私が述べたもの以外にまだ、澤山あるかも知れません。けれ共私は慢性病に共通する最も大きなものだけは見逃さなかつたつもりであります。そうして慢性病治療

に最も必要な心の持ち方だけは説き残さなかつた筈であります。而も私の説いたこゝしは決して珍らしいこゝしでなく普通の判断力を持つてゐられる人には、容易に理解されるだらうと思ひます。實際、慢性病の治療にいふこゝしは、せんじつめて見れば、それ程難しいものでないと思ひます。病を難治たらしめて居るものは患者の心なのですから、その心を適當に處置すれば、慢性病の治療は譯なく行ひ得るのであります。だから皆さんは、靜かに考へて自分の心を見つめ自ら適當な方法を案出して、以つて病に處して行く道を講じていたゞき度いと思ひます。

最後に私は今一度讀書に就いて申上げて置きたいと思ひます。讀書には申す迄もなく、自分の慢性病を追ひ出すために、各種の療養書を読むこゝしでありますが、よく慢性病者は健康者の衛生について書かれてあるこゝしを、

その儘病氣の際にも應用しようとする傾向があるのであります。健康者に當て箴まるこゝしを、その儘病者に應用するこゝし云ふのは、甚だ危険な事でありますが、やゝもするに混同し易い弊害があります。それ故健康者にこゝして健康を増進する方法を読まれた場合には、それを直接病體に行ふこゝしを避けて、充分考慮をめぐらし、然るのちに、良いと思つたこゝしを實行して欲しいと思ひます。

要するにこの書は慢性病を如何に治療するかといふよりも、慢性病を如何に考慮しそれに處して行くか云ふこゝしを主眼として説いたのであります。まして、飽迄も患者を本位として述べたものだといふ事を特に申添へて置きたいと思ひます。

最後に私は先哲の遺訓を引用して皆さんの参考に供したいと思ひます。

さいふのは、私が以上述べたやうなこゝは、みな先哲の考へ置かれたところであるからであります。

先づ貝原益軒の「養生訓」の中から引用するこゝにします。

「一、病生じては、心のうれひ、身の苦甚し。其上醫をまねき、薬を飲み、灸をし、針をさし、酒をたち、食をへらし、さまざまに心をなやまし、身をせめて、病を治せん。せんよりは、初に内欲をこらへ、外邪をふせければ、病をこらす。薬を服せず、針灸せずして、身のなやみ、心の苦なし。初しばしの間つゝし、み忍ぶは、少しの心づかひなれど、後の患なきは、大なるしるしなり。後に薬、針灸を用ひ、酒食をこらへつゝし、むは、其苦甚しけれど、益すくなし。古語に、終をつゝしむ事は、始に於てせよ。さいへば、萬の事、始によくつゝしめば、後に悔なし。養生の道、こゝさらかくのこゝし。

一、飲食色慾の内欲をほし、いまゝにせずして、かたく慎み、風寒暑濕の外邪をふそれ防がば、病なくして、薬を用ひずとも、患なかるべし。慾をほし、いまゝにして、慎まず、只脾胃を補ふ薬治し、食治しを頼まゞ、必ずしるしなかるべし。一、病ある人、養生の道をば、かたく慎みて、病をば、うれひ苦むべからず。憂ひ苦めば、氣ふさがりて、病加はる。病もくても、よく養ひて、久しければ、病もひしより、病いやすし。病をうれひて、益なし、只慎むに益あり。もし必死の症は、天命の定れる所、うれひても、益なし。心をくるしむるは、愚なり。一、病を早く治せんとして、いそげば、却てあやまりて、病をます。保養は、こたりなく、つゝめて、癒ゆる事は、いそがず、其自然にまかすべし。萬の事、あまりよくせんすれば、却てあしくなる。」

次に芝田祐祥の「人養問答」の中から引用します。

「一、客問て云、百病は心より生ず、心を修る時は百病生ぜず云り。何ぞ心を治むれば病を生じ侍らぬや。答て云、仲尼の曰く意を誠マコトに心を正しくす、孟子の曰く心を動かさず。此意コト云は一念發動の所也、一念發動の所を誠にする時は心ココロのづから正し、心正しき時はいかやうの事にも動かず、動かぬ所が則ち心の縦たる本體也。いやしくも此心修まらざる時は目の爲に色に心をうばはれ、耳の爲に聲に心を動かされ、口の爲に味に心を害せられ、目にうばはるゝ時は美色に溺れて心神を傷やぶり、耳に動さるゝ時は美聲にほれて精神をころかされ、口に害せらるゝ時は美味にほれて脾胃を傷やぶる。是皆外より來りて傷るにあらず、己の心の治まらぬ處より生る惡病也。百病豈心より生ぜずいはんや。心修まる時は七情節に叶ひて過傷する事なし。故に聖人賢者は心ココロより生ずる病なし、唯風寒暑濕の外邪ばかりを恐

る、風寒暑濕は外より來るものなれば能防ぎさへすれば、中々内へ入事あたはず、心より生ずる病は内より生ずる病なれば何共防ぐ手立なし、然ば心を修て病の生ぜぬやうにするを養生シヨウジヨウす第一の事也

客又問て云、心の修めやうはいかやうに心得たるがよきや、答云、心を修むる事は寡慾カウヨクよりよきはなし、寡慾カウヨクは惜しやほしや願はしやこ思ふ事は人情なればなくて叶はぬ物なれきも、惜しやほしや願はしやこ思ふ心を淺く少なくして物に執着せぬ所を寡慾カウヨク云ふなれば嗜愛薄し、嗜愛薄ければ心ココロのづから清靜にして外物の爲に引入られず、悠々自得して玲瓏たる事一面の明鏡に同じ、黑白醜妍忽にわかれて心頭に一物も凝滯する事なし、然らば何の病あらんや。是修心の法養生の第一也。老子經に曰、慾すべきを見ざれば心をして動かざらしむこ有り、誠に左の通なり。人心は物に隨てう

つる、見ざる時はうつらうつら、うつらざる時は随はず、随はざる時は本來一面の鏡の何も来らぬ前と同じ明々たる斗也。

客人又問、それがし生得にて物を惜しきほしきもはず、然ばおのづから寡慾に侍れども更に心は修まらず侍るが、如何致たる所にして心を修めんや。答て曰、其方には金銀米錢好色飲食斗を慾し思召し見わたり。夫は成程慾の元祖にてたゞへば此事斯致し度ごゆかぬ所を分別思案をして無理にやるも則慾也、此慾は其方の身の上に日夜有べし、然らば生得寡慾は云がたし、寡慾なる生得云は萬事自然に任せて是非くもはず、しひて事をなさぬを云也、是は賢人の場にて侍也。其方の如きの寡慾が少々學問を致したる者は早合點して居る事にて生得は云難し、寡慾に成度思へば時に靜座默念して灯下に聖經賢典を繰返してよみ候へ、其内は心に何

もなし、しばらく何もなきもへば積々ていつ修たるやら我も知らず、心が修りて大風にも大火事にも大地震にもさはがぬ所が出来る也、能く工夫有べし。

一、客問て云、人たる者喜怒哀思悲驚恐の七情はなき事あたはず、多く此七情に傷られて病をなす如何して七情に傷られぬやうに成べきや。答て云、いかにも七情は聖人賢者にもなき事あたはず、まして凡人は朝夕七情だらけ也。只聖賢の上にては喜ぶべき理を喜ぶ故によるべきも大聲立て笑ひ騒ぎおごりはぬるに至らず、怒るべき理を怒る故にいかれども眼をいからし牙を喰しばりの、しりわめくに至らず、憂ふべき理を憂ふ故に、憂ふれども頂をうなざれ食も喰れぬといふに至らず、思ふべき理を思ふ故に思へども夜中寝るらず人に對しても言いはずといふ事に至らず、悲しむべき

理を悲しむ故に悲しめども泣しほれ正體なきに至らず驚くべき理を驚く故に驚け共うろたへ廻して氣を取昇すに至らず恐るべき理を恐る故に恐れてもわなゝきふるに總身に冷汗をかくに至らず其理の明かなる事鏡のよく物をうつすが如し物云て則虚靈にして認得のわづらひなし凡心をたさへば彩色の繪の五色の綵色紙の裏まで通りて洗へ共落ざるが如し一度物をうつせば一生潤ひはなれず七情に染こみて動きもこられず故に五臟を傷り白骸を賦ひ終る。大病を生じて死すれどもさこらず唯七情を客人さなし一心を亭主とする時はふのづから認得のわづらひ薄し然れども亭主に善惡有り客人にも善惡有り亭主善人なれば客も又善人斗集り亭主惡人なれば客も又惡人斗來る亭主だに靜心成心ならば猥れがはしき惡客はふのれこ來ぬ筈也。然ば七情さにも正しきに叶ひて精神を損ひ傷るには

いたるまじ。」

次に三宅建治の「居家保養記」の中から引用します。

「世に妙薬さて、一二の艸薬を以て立處に効を得るを、神のごこくいひはやすあり、付薬或はしばらくの輕き病は、稟受堅剛の人には、服薬も害なく、効あるもあるべし、然りて、妄に用ふべからず、能くその本をたゞすべし、痢疾虚癆なきには、必ず用ふべからず、事理まちくなれば病症に薬方に依りて、的中せるもあるべければ、事を盡さざるべからず、さいへきも、病人の虚實薬方の温冷をも考へずしては危し、能く擇ぶべし。○案するに一二味の單方のみにあらず、古書に見えずして民間に傳はる薬方を以て間々治効を得て、難病を治するものあり、本朝上古の醫師の立てられたる薬方も多くして、書に傳はらず、民間に散在せるもあり、さかや。一向に侮り捨つべからず、病家

に其の藥品の能毒、病者の虚實をも考へず、妄に用ふるは尤危し、謹むべし。然れども、醫たる人、古書に傳はらざるを雜方とし、世にまれに疾める古書にも委しく論ぜざるを雜病として輕んずるは誤れり。況んや、古は稀にして、今盛に疾める病をや、たごひ萬金の貴藥たりとも、その病に効なくば何の益ぞや、一二の艸藥たりとも、効あるものは、その病に對しては良藥なり。雜病たりとも、人の苦しむは同じ、人の位階を定むるごまぐ、一向に輕んじ賤しむべからず、且病家に藥性を考へずして用ふるを謗れども、古人の辨ぜざるは、病症藥性共に、今の醫の考へ知らざる事は、病氣の人に大に異なる事なし、五十歩にして百歩を笑ふの類なるべし、加之用ひて治効あるをも理外とし、偶中して、その理を求めず。疎なるかな、治すべきの理あればこそその効あれ、何ぞ理外偶中のみせむ、皆これその道に相切ならずして、考へ知らざる。

怠なるべし。志あらむ人は、熟々思ひて勵まざらんや。」

次に稻生恒軒の「いなご草」の中から引用します。

「病みて祈禱する事、その理なしといふにはあらねど、先づ我が心道理にかなひ、いろくのひが思ひなくして、その後心正しき人が誠を盡して祈りたらばこそ、しるしはあらめ、邪念多き身にて、邪道の人に祈らせば、天地神明を汚し奉りて、いよいよ病重りなん、いかでしるしを得べしや、されば、聖人も、罪を天に得れば、祈るに所なしと宣へり、天は理なり、人の心、即ち是天なり、この心、道理に違はず、眞實にして、慈悲深く、人をみだりに憎み怨みず、横しまなる願なく、身を修め事を慎む、是をまことの祈禱といふべし、此の心を、古き歌にも

心だに誠の道にかなひなば、

祈らずとも神やまもらん。

ごぞよめる。」

「何病にてもあれ、本復を急ぐごころし、病に初中終ありて、いか程急ぎても、その時節にてなければ、なほらぬなり。然るを悶て、醫者をあまた取りかへぬれば、療治の次第違ひて、いよく本復遅し。初中終ありごは、誰もよく知りたる病にて云はゞ、瘡瘡にて見るべし、ほごほりの月あり、ほみせの時あり、膿みわたる間あり、その後やうくにかるゝなり、これを急ぎて、二三日の内にも、なほしたきご思ふ人なきは、瘡瘡には初中終ありて、なほる時ならではなほらぬごいふ事を知りたればなり。他病も亦此のごごし、名醫ごいへごも、初發の病勢盛なる時は、薬が病に負けて利かず、中頃も、病勢なほ勝ち難し、少し病勢の弱るを見て、なほさんごするを、その日數に堪へ兼ねて、無理

に本復を急ぎ、一醫の薬を、二服ごも用ひず、取かへくする程に、何かはよかるべき、後には又、醫者にその用ふる薬方を尋ね聞きて、その薬方ならば、さきにはや、誰々用ひたり、別にこれくの方、調合あるべしなき、醫道も知らぬ人が指圖し、或は誰の家の妙薬なきいふ物、品々用ひても、しるしなれば、病家も醫者も、手を束ねて、すべきやうなきに至りて、木乃伊ごいふもの用ふる談合になりて、もはや、さきのいろくの薬は、ふさへおけば、薬毒にせめられし脾胃も、少しひまあるによりて、ちご心持よきやうなれば、これ木乃伊の効なりご思へり、悲しきかな。」

慢性病治療術 — おはり —

昭和二年二月二十八日印刷
昭和二年三月三日發行

正價 金貳圓五拾錢

內務省
不納本製
複

慢性病治療術

著作者 小酒井光次

印刷人 橫田秀三
京都市上京區吉田泉殿町

發行人 渡邊久吉
京都市河原町二條下ル

發行所

京都市河原町二條下ル
日本心靈學會

電話五八四八番振替
東京二八四五九番
大阪一三六三二番

第三高等學校 教授 文學士 平田元吉先生著

▲四六判三百四十頁
▲A1紙寫眞挿入
▲裝幀クロス箱入

▲定價金貳圓參拾錢
▲郵稅金貳圓拾八錢
▲代金引換金貳圓五拾八錢

重 版

近代心靈學

◆著者より讀者へ……此書は新學の入門たらしめんとするものである……多くの學者の此現象に對する研究のうち最も確實なるもの及び最も顯著なるもの、概略を叙した……此書を以て世の學者をして斯様な研究の可能存在を知らしめまた人々をして興味ある人情の學問の新版圖のありを心に印せしめん事を望む……

新らしい學說や發明は往々にして頑迷なる學究や保守的思想家や無智な民衆から迫害される。心靈學の研究も此例に洩れなかつたのであるが眞理は最後の勝利者、事實は雄辯家であつた。即ち心靈學の眞理と事實は、汎く識者間に認めらるゝに至り或程度まで科學的に立證せらるゝやうになつた。新たに刊行した此書は、的確に此等の心靈的なる事實を眞理を叙したもので近代心靈學の起原及略史より筆を起し、精神感應の理から幽界の消息に互り、靈の生活實存の親切に證據たる所謂交互適應に及び更に心靈の物質化及物理現象を説く等三編二十餘項に分ちて親切に解説される。著者平田教授は過去十年間熱心に心靈學を研究し殊に英獨兩國語に精通し歐米の文獻を涉獵する。著者平田の深きは本邦學界屈指の人である。さらば此人にして成されたる本書は平易に凡ての心靈現象に對し學術的斷案を下せる好著として絶好の參考書たるべし。信じて之を一切の讀書子に薦めらるゝ。

發行所

京都市河原町二條下ル(振替大阪壹參六參貳番)

日本心靈學會

文學博士 福來友吉先生著

正 價 金貳圓五拾錢
書留送料 金貳圓拾八錢
代金引換 金貳圓七拾五錢

增補三版

生命主義の信仰

本邦學界に於ける唯一の神秘心理學者として、祈りの學者として、將又信仰の人として、驚くべき心靈的體驗者として、尊むべき求道の士として、博士の研究と思索の結晶を(一)吾人の信條(二)生命主義の信條(三)生命の流れ(四)眞實の世界(五)生命の眞善美(六)靈の禮拜(七)生命主義(八)信仰の生活(九)共同の生活(十)社會成佛(十一)神秘の國への各章に別ちて叙述する。蓋し心靈論、宗教論、信仰論、身心論のエキスであつて靈の權威を説く警世の韻あり、痛烈峻峻な議論もある。而も高聖透徹なる内容が平易なる口語體を以て表現され、靈界思想界學術界の最高文獻であると共に福來先生其人を打出したる書である。

人間の生命を孵化する大文字を盛れる本書は破綻に瀕せる物質文明への光明にして十字街頭の心靈的宣言たると共に魂の復活書たるべし

發行所

京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番)

日本心靈學會本部

文學博士 福來友吉先生著

四六判四百餘頁
定價金貳圓八拾錢
アート紙寫眞三十餘面
郵券金拾八錢
裝禎クロース箱入
代金引換券圓八錢

第三版

觀念は生物なり

微妙靈通なる純粹精神は觀念化して初めて肉體に作用する力を持つて來るは博士の學說の基本なる主張である。觀念即ち心は力であり生物であるが故に色々の事が出來、又色々の現象が生ずるのであるこの理を各種の實例をあげ極めて通俗的に書かれたのが此書である。

内容

- 觀念と身體の關係
- 私の能力と人性
- 動物主義
- 夢
- 潜在精神
- 秘密の心と病氣
- フランセツトの話
- 模倣性と病的傳染
- 精神
- 神的養生
- 精神の虛實
- 宮本武藏の劍道
- 透視の研究
- 念寫
- 生命學と心靈研究

以上は大體の項目であつて各章を十數節に分ち渾然一體系をなし生物なる觀念の作用が如何に強く又如何に微妙であるかを説明して剩す所がない。蓋し此書の如きは心理學未踏の神祕境をスラ／＼通俗に説明した心靈學教科書として見るべき學界無比の書である。

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番) 日本心靈學會本部

文學博士 福來友吉先生著

定價 金貳圓五拾錢
送料 金拾八錢

第五版

精神統一の心理

博士は此書中に言へり「私の精神統一の心理說中には從來流行の心理學から見るに極めて大膽不敵な主張があります。けれども私は必ず信するべきものとして疑はないのであります。私がこの主張を如何に論ずるか。讀者が充分に理解なさるゝことを望みます」

精神は統一せなければならぬ。精神を統一すれば不思議な働きがなされる云ふやうに、何人も屢々精神統一と言ふが、而も精神統一の意義、その心理を正しく把握するものが幾人あるか、精神統一境は、絶對の地、解脱の地、靈玄高趣の地、精神的深奥の域である。この絶妙境、即ち如是の一道を學術的に、そして極めて平易に講述された本書は、心理學にして同時に哲學であり、又實に人間觀念の諸相、心靈學の全問題を包括して居る。觀念及人格の構造から、精神統一の意義、能力主義の統一、安心主義の統一等に分ち守護靈、惡魔、業、祈禱の心理、感應道交云へるが如き宗教意識に觸れ、生物學、生理學も交渉を保ちつゝ統一されたる精神の偉力又その統一方法を講じ幾多の實例實驗を擧げて先人未唱の一大斷案が下されてある。蓋し本書は人間の實際生活に新使命を宣張するもの云ふべきである。思ふに此書の如きは博士によつて初めて講述され得べきものである。本書によりて何人も統一の妙趣を知ることが出来るであらう。

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番) 日本心靈學會本部

日本心靈學會會長 渡邊藤交氏監修 日本心靈編輯部著
正價 金壹圓五拾錢
郵稅 金拾六錢
代金引換 壹圓七拾錢

增補四版

靈の神秘力と病氣

心靈叢書第一編

初版刊行以來重版又重版した本書は新研究を採り入れ増補第四版を出した。若し夫れ本書を讀んだら、けで病氣が半ば快癒したやうに思ふこと云つた慢性病者のあるに徴しても其内容が窺れるであらう。

四編十數章に區別し病氣は何ぞや云ふことから現在の生理學病理學を檢討し更に病氣と心靈力との如何に深い關係を持つか又其の心靈力がされだけ病氣の發生を治療せざるべからざる所以を説きて以て醫流の鑑戒を促し進んで靈の神秘力がさうして活動するか云ふことを解明したもので、殊に公平なる立場に於て編纂叙述したのも特色である。即ち各種の實驗結果を、内外諸學者の意見論議を參照し、人體に通有固在する靈性病氣との間に關聯する深文なる眞旨を何人にも直ちに分るやうに説明し、巷間の類書と全然其選を異にする。さらば病患治療に従ふ人、健康を望む人、病氣に悩む人々は本書によつて得る所、慰めらるゝ所、啓發さるゝ所が多いと思ふ。靈の力の神秘なるを知らんとする人々に薦む。(四六判二百三十頁)

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三三番) 日本心靈學會本部

文學博士 福來友吉先生卷頭論文 日本心靈編輯主任野村瑞城氏著 定價金壹圓 郵稅金拾六錢

重版

原始人性と文化

心靈叢書第二編

鋭き本能が靈的に統一されて眞の文化は生まるゝ断せる人間心靈の發展史、科學を超越した心の神秘、靈の能力が人間生活の實相たる事を明示しつゝ、苟くも日本人ならば知らねばならぬ諸事項を噛み砕く、面白い、而して有益な快書!

凡ての人間、凡ての國民、凡ての民族は心靈的信仰の後推しがなければ健全に發達せない所以を天賦靈性、人性觀の上から論斷し讀者の興味を惹く事が多い。殊に日本人の故郷を尋ね神道シヤマニズム、日本人の太陽トテムたる事に論及し原始人現代人の靈魂觀原始人の萬物生氣主義現代の神秘主義、原始人のアニミズム現代の電子説等と比較し或は動物、庶物、生殖器の崇拜等に觸れ、神々や佛達を苦笑せしめる文字を弄して博引旁證上下二篇二十餘章に亘り小説を讀むが如き面白さを持たせる、私達が平常見聞せることでも其原始には心靈的要求があり又コンナな傳統があるのかと驚くやうな説明が隨所にある。一切の人々に讀まるべき快書である断言するに憚らぬ。

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三三番) 日本心靈學會本部

日本心靈
學會々々長

渡邊藤交先生序

日本心靈
編輯主任

野村瑞城氏著

定價金壹圓五拾錢
郵稅金拾六錢

第三版

靈の活用と治病

醫家に支拂ふ一日の薬價を此書のために投ぜよ。さらば神薬にも勝る治心療病法を握り得べし。如何がはしき靈術屋の所謂秘傳書に勝る。此書は此意味に於て天下至廉の書なりと信ず……(著者)

あらゆる方面から讀まれた「靈の神秘力と病氣」の姉妹書續編であつて、前著に説き及ぼさなかつた事項に觸れ又前著の意義を布衍し「人の生き方と物心」「人性の能力と疾病」「靈的治病作用」の三篇を更に十七章に分ち何人も持つ所の靈力を驅使活用して疾病の治るべき理論と方法を明示する。在來の健康書類のものにあらざるは勿論、斷じて好奇を唆る浮薄な述作ではなく著者の研究と體驗の披瀝である。嘗に病める人々のみならず健康者もこれを讀め。(四六判、二百四十頁ボイント活字組)

發行所

京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番)

日本心靈學會本部

心靈叢書第三編

日本心靈
學會々々長

渡邊藤交氏監修 日本心靈編輯部著

定價金壹圓五拾錢
送料金拾六錢

第四版

病は氣からの新研究

新らしき科學的知識を經とし東洋意識の靈趣に由來する病理説を緯として通俗に疾病の發生と其治療上に於ける一鐵則を解説したる唯心醫學書!!

諺に云ふ「病は氣から」は永久に眞理である。病は氣によつて起るものならばまた氣によつて治らなければならぬ。抑も病は氣からの?氣は何であるか?此疑問に明答を與ふべく通俗的に編述した一書である。即ち第一篇には人身生理病理の概要を略叙して先づその大要知識を讀者に與へ、第二篇には精神的状态乃至はその作用が人體に如何なる影響を及ぼすかを眺め、第三篇には靈肉不二なるも而も靈主肉従であるとする主張を説き第四篇には病と氣との両意味を且つその本質を究明釋し「病は氣から」の語は疾病の發生及治療上に於ける一鐵則たることを明かにする。無論その間臨床醫術の上に新らしき境地を拓いた内分泌説、精神作用と密接に交渉する云ふ神經系統のうち植物性神經の機能の新學説を解剖し或ひは「氣」の正體を各種の方面から究明したるなご通俗的な唯心醫學書として見るべく、眞に新研究の名に背かざる事を自信する。

發行所

京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番)

日本心靈學會本部

醫學博士 小酒井不木先生序 — 野村瑞城氏著 — 定價 金壹圓五拾錢 送料 金拾六錢

好評 第八版

疾病自隱と夜船閑話

心靈叢書第五編

すべて人間の體驗を述べた記録ほぎ尊いものはない。白隱のやうな偉大なる人格者の體驗記録は其の悩みが大きかつただけそれだけ読む者の心を引つけずには措かない。私は世の難治の病にやむ患が一日も早くこの書を読んで一日も早く其心に頼り、もつて白隱の如くみごみに病魔を驅逐してほしいと希つてやまない。(小酒井博士序文の一節)

禪門中興の祖云はれ宗教意識の博大だつた白隱禪師が療病の體驗を録した「夜船閑話」は古來幾多の人々には讀まれてはるが、たゞ「素人」には禪的語録に似て詞句に難解な點があるのミ感覺本位の思想が一般を支配してゐる現時内觀の秘法を説いた之が動もすれば閑却される風がある。それで此尊むべき古聖の養生方法を一般に普及せしむべく本文ミ對照して現代語に譯し、平易なる註解を施すミ共に新しい眼で白隱の體得底を眺めつゝ、この方法で病が治らなかつたら斯く云ふ老僧の言を斬つてもよいミ白隱が自ら保證した療病養生の方法を講述し、靈の活きたる力は病める肉體を復活せしめる所以を説いて剩す所がない。更に附するに白隱の風格、逸話等を以てするの外益軒、樗山、篤胤、元良等の養生法を述べて本文ミ照應せしめてゐる。

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番) 日本心靈學會本部

京都帝國大學 教授醫學博士

今村新吉先生述

□定價金六拾錢 □郵稅金拾四錢

再版

神經衰弱に就て

見よ！平易なる講話的形式を以てせる博士の講座公開

日本心靈學會創立十八周年紀念學術講演會に於て講述せられたる筆記を増訂されたもので恐迫觀念及び恐怖心を説き次で一般神經衰弱とヒステリーの本體を明かにし博士が専門の精神病學は勿論、所謂病人心理に觸れ、或は博士の臨床上の實驗を以てし、神經機能、精神作用の微妙なるを説き、更に其治療方法が講ぜらる。必ずしも大冊ではないが斯學界のオーソリテーターたる博士の蘊蓄が如何に深く且つ大なるかは本書を讀んで初めて首肯し得るであらう。若し夫れ、藥劑萬能の醫家の云はんとして云ひ能はざる所を直指し

患者と治療家と而して醫家の迷妄を打破

するの高説は此書中に發見される。思ふに凡ての疾病、殊に慢性病者は大小の程度こそあれ、病的恐怖に襲はれ神經衰弱的徴候を來たすものたる以上、此講話の如きは一切の慢性治療家の指針となるべき智識を與ふべく、一般人士にミつては切實なる修養の資料たるべしミ信する。斯くの如き有益なる書の刊行を許されたる博士の好意に對し本會は深く感謝するミ共にまた一の喜びミ誇りを感じるものである。

發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪壹參六參貳番) 日本心靈學會本部

京都帝國大學
教授醫學博士

今村新吉 先生著

◆◆定價 金貳
送料 金十八圓

最新刊

神經衰弱と治療法 ヒステリーの治療法

斯學界の一人者と謂はる、博士の邦文を以てせる講述書は獨り
本書あるのみ。其病的原理を講ずると同時に治療法に及び、平
俗を旨としながら尙儼として基準書たるの價値を有つ

京都帝大教授にして現に大學病院長を兼ねられる博士が現代日本に於ける神經系學界のオーソリチ
たるは改めて云ふまでもないが此書は博士の講述書たるだけに、從來刊行された類書即ち心理學
哲學上の智識なく單に症候を説いた經驗家の通俗書等とは全然その選を異にし、人間の心理及異
常心理を通じ神經衰弱とヒステリー患者の姿を凝視しつゝ、深き神經學的智識を以て
その原因と症候とを解釋し進んで治療法にまで及ばれたのである。佛蘭西文獨逸文の發表は
あるにしても、邦文を以て然かも通俗的に其病的原理より進んで治療法に亘り博士の説を纏めた
るは本書を措いて他にはない、従つてたゞ本書に於てのみ博士の學說と療法を完全に知るこ
とが出来やう。蓋し信頼すべく、且つ權威ある指導書たることを斷言する。

▲發行所 京都市河原町二條下ル(振替大阪一三六三二番) 日本心靈學會本部

60

851

終